

146  
490

大乘洒落禪

019715-000-6

特63-436

大乘洒落禪

無仏居士/編

M34.3

ABG-0518



特



特63

436



政信



風流進取之圖

奥村政信藏書

無佛居士編并評

# 大乘洒落禪

完

東京書肆

藍外堂藏版



## 大乘洒落禪自序

先き頃編者の荒原家を煤掃したる時打毀れた本箱の中より斯な古い反古がノソリ出たり乃で順序を次第志て斯ふ一部の書としては見たものの、サテ編者のやうな該博深通の學者が讀んで見ても大分解り兼る所多ければ、之を世に公けにして他の人々に買て讀せた所が能く他の人々には解るで有らふか如何だらう、此時本屋め訝う師家を氣取り編者を雲衲視して曰く編者にさ



へ分らぬものを出版したとて誰が買ふものぞ、  
 ト乃で編者も彼の隻手無聲音も先は荒増鑑定を  
 付たる雲衲然として師家氣取りの本屋に所見を  
 述て曰く本屋の君が然ういふけれども世の中に  
 予が如き讀んで解らんでも宜と云ふ人が買ふて  
 有らう、本屋曰く否な未だし予曰く否な未だし  
 にあらず世間實際の事情を視察すれば本を買ふ  
 者は大半讀んで解らぬものを買ひ、編者は概ね  
 他人に讀せて解らぬ書を著作し居るにはあらず

る乎、本屋茲に於て黙、此時予は反つて師家を氣  
 取り鐵骨を振ひ本屋の背を打して曰く喝、熟考  
 すべしと

明治辛丑正月

無佛居士識



## 凡例

一本書は數十種の古洒落本の中より所謂洒落禪とも稱し得らるべき價値あるものを拾録したるものなれば筆々句々及送り假名の配置等は固より一樣ならず然れども其中に就き談話の長さ分は二席に切り讀み句切り悪き所は聊か手を入れたり讀者之を了せよ

一本書自序の外は本書へ拾録せし原書の序文にして自序と拾録原書の序文と甄別せんが爲めに拾録原書の序文に鼈頭に標注を置けり

一又書中一説毎の初めに五字の標題を掲げしは更に佛祖の金口中より趣味深甚なるものを撰み出したるものとす其他每説の

鼈頭に拈提したるものも亦然り故に讀者仔細に首尾上下を照覽し玉は其趣味の多きは亦必ぞ言ふ可らざるの中にあるべきなり

一又一説毎の終りに其一篇の大要を拈示したるは讀者に其説の要旨を豫め知らしめんと欲するの微意に過ぎず

編者 又 識



拈起則佛  
祖不識放  
下則草木  
發榮

序

ズット高ひ樹の上へ登つて、口に樹の枝を啣へ、手も足もはなして、ぶら下つて居る所を下から、八兵衛コワイか、術ないか、ドフじや對をせぬかいやい、とは餘程無理な様なことなれども、工夫さへすれば随分對の出来ること、この對が出来さへすれば、ツイ脚下に有る本心を茶漬にせうとまじやげな、けれども、此對が心安そふに、出来るのではない、ホンニないついでに、近頃めつた無障に、ない／＼と言ふ事が流行げな、一切の物が皆ない、神も佛もない奇瑞も罰もない、罪も報もない、其證據には御祓で鼻かんでも、愛宕の花を踏でも罰の當た事はない、何にもないトントないないと云ゆへ、撥鬘天窓に釣ひげ、

列萬象於  
目前裁群  
機於量外

紺の大なし着た男かと思へば、そうでもない、そふでもない筈の事、全躰がないによつて、そふでもないはず、大方懸取が來ても、ないないで仕舞て置のか知らぬ、有ても無ても欲に限りはない、金錢の星祭したとて、商賣せず遊で居ては、鼻の下ながふのばした竿竹に、犢鼻褌風に吹き嵐、動を見て、アレはふんどしの動のじや、イヤあれは風の動のじや、イヤふんどしじや、イヤ風じやと、互に片意地張て居るを聞かねて、コレ／＼あれは、ふんどしが動のでもなく、風の動のでもない、貴公た衆の心が動のじやと、澄た顔で云れたは、是が彼の茶碗か鳴たか、烟管が鳴たかと云のも大方この様なものであろかい、ハテ諸それは推量と云もの、何でも推量ごとは役に立ぬそれじ



やによつて……

是道子戲書

蝦跳不出  
斗

序

高而無上深而無下雖則賢聖莫測者乃凡夫迷流心性今日目前之境  
界乎故閑窓下塵茗前終日談非度之處能及竟夜說無數之所能領若  
夫知音則月擊而道存而已

東武 秋路川 空山烟輕業

割肉作瘡

叙

大鋸屑も結ば結れるとかや、羽二重の裁に木綿のぼろを綴り合

せたれば、得知れぬ綾八を成せり、友人に贈りて一笑を求る而已

ト々 齋書

叙

客あり卒爾として余に謂て曰吾子河漏と西水の食忌を知るや鯉  
は胡椒を惡み鮓に砂糖の相反あり果然として禁忌の制を犯す時  
は終身の憂を醸す堯舜に紂桀を調味し貧夫に夷齋を鹽梅するは  
性命道德の食忌なり吾子が此編に於るや亦然り仁義の教と清虛  
の教とを別隴す浪に孔孟莊釋の異味を和饗とす將輿槌漢に響應  
歟抑後世の易牙を待歟余が曰客知らずや孔子の舞雩孟子の養浩

古今無二  
路達者共  
同途



これ仁義の厨冊にも莊釋清虛の風味を醬とし莊列虛無の膳部に  
 も仁義の滋味を味ひしれり故に甘を愛して苦を惡み辛を好んで  
 鹹を厭ふものは未だ味を知るものに非ず八珍の外野萩海錯の  
 味あり大半飽りと雖も雞肋豈捨べけんや客唯々として退くこ  
 れを序とす

攝江眞冥 山田長興識

序

黒羊子克齋ニ過ル。其主人短褐衣ヲ着。折角巾ヲ戴キ。書ヲ左  
 ニシ。筆ヲ右ニシ。意烏於邑シ。愚若狸トシテ。如ニ神離者一如ニ  
 心疾人。浪人之袴ノ如ク。河漏ノ軟ガ如シ。賓々然トシテ。虱  
 チ捫テ呼。曰。于嗟黒羊。來前。汝雀ノ蛤ト爲ルヲ知ル  
 ヤ。黒羊子對曰。我其語ヲ聞ク。未レ見ニ其實。曰。薯蕷ノ鰻鱺  
 ト爲ルヲ知ルヤ。曰。不知。於是主人不レ悅。瞋レ目切レ齒。牛ノ如  
 ク喘。貓ノ如ク悶。弗然トシテ曰。嗚呼汝ハ眞ノ羊也。愚ニシ  
 テ與ニ語ル可カラズ。叱去。黒羊子。膝行頓首シテ退ク。退テ  
 思ヘドモ。其説ヲ得ズ。少頃シテ。又前テ曰。管三ハ君子也。  
 空海ハ貴僧也。俗之巫誑ナル。變ジテ竟ニ雷ノ親方。若衆ノ開



山トナル。以謂雀ノ蛤トナリ。薯蕷ノ鰻鱺ト爲。説ニ非ズヤ。  
 主人歡喜微笑シテ曰。善哉善哉。其書ヲ投テ見セシム。黑羊  
 子閱シテ曰。是蓮胤兼好ガ流亞也。主人曰否。彼等ハ皆或ハ三  
 位ニナラザル怨言。師直ニ睨レテノ遁辭。我ハ衆惑ヲ破ラント  
 欲ス。汝何吾ヲ以。彼地震ヲ恐。火災ニ脅。饑饉大風都遷  
 ニ辟易セシ腰拔。西臺ノ反辭ヲ。公義ニ先ヲ越サレ。伊州へ翔  
 落シテ。伊賀守護ノ。獨娘ニ意氣傳タ。奴等者ニ比スルヤ。  
 胡盧胡盧。此書ノ全意於是乎明矣。

黑羊子序

○大乘洒落禪目次

○ 枯木不逢春	一五
○ 騎賊馬趁賊	二六
○ 鑊湯無冷處	三四
○ 髑髏前見鬼	四一
○ 泥裏洗土塊	五〇
○ 劍握甌人手	五六
○ 水流元入海	六九
○ 天高群象正	七六
○ 淨穢閑家具	七九
○ 出門逢釋迦	八三
○ 主賓分兔馬	九二
○ 鏡藉重磨瑩	一〇三



○ 甘露亦殺人	.....	一〇四
○ 白雲起峯頂	.....	一〇五
○ 靠倒維摩詰	.....	一〇六
○ 高步毘盧頂	.....	一〇九
○ 泥佛不渡水	.....	一一一
○ 醉酒打彌勒	.....	一一三
○ 步步是道場	.....	一一五
○ 法々本來法	.....	一一八
○ 棒喝辨龍蛇	.....	一二〇
○ 南無乾屎橛	.....	一二二
○ 棒下無生忍	.....	一二八

○大乘洒落禪目次終

大乘洒落禪

○枯木不逢春

無佛居士編及評

國學者平田篤胤の曰く、今日は悟道と云との論辯でゐるが其はまづ佛道諸宗の安心サトリと言との根を段々に去て探れば、先日も申す通り氣海丹田に氣を充しめ、安心して可成は長壽を保んとするが故の事で、是より外には何にもなしてゐる、然に其趣意なきとを趣意あり氣に持賞て、佛者どもが是を事々敷、悟り杯と云立て、中にも禪僧がヤカマシイでゐるが、此悟と云事、世の常の人々が其穴を知らず、僧等に謀られて何か奥ゆか



しく妙なる事で、その悟と云ふ場へ修し至れば不測な事でも有る様に心得て居るが一向やくたるな事で、吾師本居先生の歌に「悟るべき事もなき世を悟らんと、思ふ心ぞ迷ひなりける」と詠れましたが、實に見ぬかれたる歌で、世の禪學などを致す者どもに能く云きかせ度もので、何も悟る事は有りもせぬものを禪僧に欺されて悟らうと思て居るが生れもつかぬ迷ひで、その禪僧どもの欺しと云は、まづ其者等、人に悟りを勧めるからは、己々は何を悟つて何か人に異たる不測があるか、何も無いはず、夫は此道を始たる釋迦さへそうで、悟つた験も何も無く生老病死を遁んと尻の毛へ火の付た様に噪ぎ廻て修行したがつトト叶はず、年が寄たれば皺くたになり背が痛い

透過非是  
開不任羅  
籠裏

ノ腰が痛いノと云ひ出して、あげくの果に周那と云者の爲に茸で毒害せらるゝも知らず悟らず煩つて、七十九歳の時、杓尺城と云ふ城の外の山中でトントのたれ死を致したで、是らは天竺のキツト慥なる經文に記し有事で、其の元祖すら斯の如くであつた故に況て其流を汲む僧どもが、何を悟るものか、悟つた面で人を欺き、佛道の眞の事を包隠して宜さまに云なし、悟道々々と云ひなして愚人を惑はすので、其惑はし種に云ふ、語と道歌ナンドの多き中に、能く人の知て居る「暗の夜に鳴ぬ鳥の聲きけば、生れぬ先の父ぞ戀しき」と云ふ是が中にも人の喧しく云て、悟道の極意を詠たる歌で、心も言も及び難き深意妙意のある事チャと世の小賢しき輩が其小賢しき心と己の心



に眩くらまされて居るがこの歌は人惑おぼはしに云ひ置たる禪僧ぜんそうのオドシで、大きおほに人ひとを愚おぼにしたもので都すべて禪僧ぜんそうの語ことばヂヤ、其道そのだう歌かヂヤのと云もの、又その行ゆひの常じょうに異かつた變かはな事を爲なすなどは、皆人ひとを愚おぼにするのでさる、世よの人ひと其所そこに心こころつかず、禪僧ぜんそう等らがする事をば、其云言そのいよことも行おこなひも、皆みなな悟道ごだうについて深ふかき故ゆゑあり深ふかき心ありての事ぞと信まじて、彼等かれらが人ひとを愚おぼにする術計じゆつけいに、うまくと載のられて、道理だうりの深ふかき事ことでも有あうと惑まつて居るのが見るにも聞きにも氣きの毒どくでドゥモならぬ、夫それはまづ此歌このうたに「暗やみの夜よになかぬ鳥かすこなの聲こゑきけば」と有あがサ何なんと暗やみの夜よに鳥かすこなの鳴なう筈はずは無なし、又その鳴なもせぬ鳥かすこなの聲こゑをどうして聞きれませうぞ、これは誰たれにも通とるぬは知しれた事ことだが、その通とるぬ事をきいた風ふうに云いひ成なして途方とほう

もなく深こゝろき理ありけの有あり氣きに持賞もてはめし「生うまれぬ先さきの父ちちを戀こひしき」など、結むすつけて人ひとを威おそし暗やみの夜よに鳥かすこなは鳴なぬ所ところを、其鳴そのぬ鳥かすこなの聲こゑきけばと云いからには深こゝろき故ゆゑある事ことで有あうと腕うでを組くせ、此こゝに妙めうなる謂いはれ有あうと、人々ひとびとの己おのれが智惠ちゑに昧くらまされてまごつき惑まぶ様さまに爲なり掛かたる威おそしさる、猶なほまた悟道ごだうを得えたる人ひとは斯こうした者と信まじさせんが爲ために、自おのれは世よの道みちに異ことなる所ところ爲なすを見みせて何か公然こうぜんと構かまへを爲なして横柄よこばなに人ひとを對遇あしちひひ高貴かうきき人ひとをも恐おそれぬ類付つらつきなどを致いたして居るが、夫それも皆みなおどしでさる、この威おそしを以もて人ひとを惑ます事を、近ちかき事ことで云いは、能よく世よの心學しんがく者しや、道學だうがく者しやなど云い輩ともも擬まねでする事ことヂヤが、禪僧ぜんそうの爲ためさまが、譬たとへば其道そのみちをきいたいと云いて入り、始はじて參禪さんぜんしたる者ものを、まづ威おそし始はじめに書院しよいんへ通とほして、まづした、か待またせて、



然て弟子僧どもに大層な褥を布せなどして、サテ老僧奴が拂子を振拂ひなどして例の如くドンな者にでも横柄にもものを云ひ、憎き面をして居る、サテ辭儀をすると僧めは却て後へ反る、ソコで扇子にも有れ火箸にも有れ、あたりあいに出して、是は何チヤ、其許知て居るか、など云て突つけると、其人は膽を潰しながらも正に知れたる扇子や火箸を出して是は何チヤと云から、故有て云事で有うとマゴツキ出して、火箸ども扇子ども云ひかねて、ムヅ／＼として居る、また正直な者は、夫は即ち鐵で拵へた鐵火箸でムる、と云と、其導師メが、イヤ何これが火箸だと、是を能く見やれ、是が火箸なものか、是を火箸と思ふ様な事では、道には入られぬ、其許は愚な男チヤ、など、

酷しく叱て、是は鐵火箸ではない考へて見やれと投付て遣るか、サ、是でまた此人もマゴツキ出して、其火箸を手に取て爪でひつ搔たり何かして、見る所が鐵火箸に相違ないから、私の目にはドウ見ても鐵火箸と見えます、と云と、導師が竹篋ふり舉げ、目をむき出して、初對面而未だ馴染もなき人を、居丈高に成て叱りつけ、是を鐵火箸と見たる愚者よ、と云さま不意に起て腰やら肩やら頭やら、目口もわかず、したゝかに撃のめし、尿タワクめが、などと苛い目に合せて、襖引たて奥へ入ると、毆のめされた人は、思がけなく足腰が立ぬ程な目に逢て怨めし氣に奥を見やり、ア、ア、ア、痛い、苛い目に合せたな酷く撃倒しおつた、ナド、云て其痛い所へ唾を付などして起上る



が、ユンナ苛目ひせいめに合あつても、禪僧ぜんそうに毆打た、かれた計はかりは公事くじにも喧嘩けんかにもならぬ法のせよもので有あらドウモならぬ、尤もつとも其仲間そのなかまうちでも論ろんに及およぶと、しまいは撃うつて掛かり摑つか合あひにもなる事ことで、何でもその先せんを越こした者ものが勝かちとなる事ことで、諸もろ又またかの鐵火箸かねひべしを正直しやうぢきに鐵火箸かねひべしト云いて撃倒うちたばされたる人ひとが、夫それで措おけばよいに、現けんに火箸ひべしヂヤ物を火箸ひべしではないと嚴きびしく云いから、然しからば故ゆゑこそ有あうと迷まよひが起おこつて、是非せひ悟ごる氣きになる、是これが、かの吾わが師しの翁おきなの詠よまれたる「悟ごるべき事もなき世よをさどらんと、思おもふ心こころぞ迷まよひなりけり」の所で、禪僧ぜんそうの威おとしの畏おそに懸かつたので、實じつの所ところは先さきに是これは火箸ひべしではないと云いふ時に、此方こちらから飛懸とびかつて、コノ無法僧むぽうそうメ己おれは其手そのてでいくのヂヤなると、踏倒ふみたばして撃倒うちたばし、ドウシテ火箸ひべしに相違ちがはな

いと云いひ張はつて、起おきかゝつたならば蹴倒けたばすか組伏くみよせて擲たきのめし、ドウでも火箸ひべしヂヤ、と云いひ張はりさへすれば、僧ぼんは大きおほきに胆はぢを潰つぶして善哉ぜんさい々々汝な得えたり道みちを、なご、美ほめて悟道ごどうの仲間なかまとするで、ムる、然しかるに、かのマゴツイタ奴やつをば、種々いんくな事を云いひかけ、いじめつけて、座禪ざぜんしろの觀相くわんさうしろのと、彼是かれこれとマゴツカセくして懲こしめる、ソコデ其者そのものが心付こころづき、ドウ考かんがへても鐵火箸かねひべしだもの、鐵火箸かねひべしではないと云いたのは、己おのをマゴツカセたのヂヤ、と云い事を看破かんぱして、座禪ざぜんも何なにもいるものか、嗚呼あゝ大墓おほはかな事に骨折おれぞうたど、股ひざを拆たいてクワラリと疑うたがいを晴はらす、こゝが禪家ぜんかの悟ごりくくと云いひふらして人を惑まどはす穴あなで、かの鳴なぬ鳥からすの聲こゑを聞きくと云い、かの人の能あたり知して居ゐる、原はらの白隱はくゐんが隻手しかたてを出だして、此音このねをきい



白隠禪師  
隻手歌  
山居せば  
よし野の  
奥よそれ  
よりは隻  
手の聲や  
ふかき隠  
れ家

たか、拍め隻手の聲をきけく、と云て人を導いたと云も此譯  
でゐる、鳴ぬ鳥の聲や、拍め隻手の聲がドウして聞えるもの  
か、是ら統て禪僧の人を威して、トホリを喰せるのでゐる、此  
方も随分、歴々の禪學者をへこたれさせた事が有が、是はまづ  
云まいでゐる、白隠が隻手の聲をきけく、と云ひたるに付て、  
即ち原宿の搗米を賣る者で有たそうなが、白隠の門の扉へ大文  
字に「白隠が片手の聲を聞よりも、兩手たゝいて商ひがまし」  
と書て置たれば、白隠が返しに「商ひが兩手たゝいて成ならば、  
隻手の聲は聞くに及ばず」と云たと云事ぢやが、是はこの米屋  
に威の穴を見付られて、斯くいわれたに依て化の皮を顯はし、  
ぬからぬ面で斯様の返しをしたもので、都て禪學者の所行と云

猛火鐵燒  
雲佛喋

ものは、人威に爲ことばかりでゐる』とは、篤胤の見識なり然  
れども、彼れ未だ「感情は理説の先導者」なりと云、確乎不拔  
の格言を知らず、知らざるが故に唯に口から出任せに冷評をな  
せしのみ、火箸を火箸と見、火箸を火箸と見ざるも、扇子を扇  
子と見ずして、扇子を扇子と見る底の事は我が道としては不思  
議とするに足らず、論より證據、左の一節を熟讀して、理説の  
感情に及ばざるを知るべし。

評 此一篇ハ、禪學者ノ妄想、即チ俗ニ云フカラ悟リ、カ  
ラ見識ノ大ニ非ナル事ヲ攻撃シタルモノニテ、眞正ノ悟道  
マデモ其非ナル事ヲ攻撃シタルモノニアラザルコトハ、仔  
細ニ本篇ノ文意ヲ讀下シテ之ヲ知ルコトヲ得ベシ、最モ本



篇ハ、神道ノ蘊奥ニ通達セシ者ノ見識ヨリ、禪門ノ弊竇ヲ  
 列舉シテ、攻撃シタルガ故ニ、多少我執ノ嫌ナキニアラザ  
 レドモ、亦タ其禪弊ノ肯綮ニ的中シテ妙ナルモノアルニ至  
 リテハ、頗ル敬服ニ堪ヘザルナリ。

○騎馬ニ趁賊

今は昔、京都の町はづれに、四海波先生と云ふ人あり、専ら歌  
 を詠せて、弟子を開悟させ、歌は銘々の情を述べて意味を合む事  
 の深き物なればとて、毎月日を定めて悟の講釋、その跡で心法  
 の工夫歌をよませ、儒にもあらず、佛にもあらず、老莊でもな  
 く、一家の見識見ひたらいた處が、雲晴れて一天四海波、浪風

の動々たるばかりなれば、弟子衆の中にも見開た人なれば動の  
 一字を許され、一動、久動のと其名を呼ぶ、同じ門弟中に、菓  
 子屋仙兵衛と云人あり、未だ動の字は許されねども、其心甚だ  
 移り安く喋々敷、心法の講釋を聞こみ、胡椒丸吞に志たよう  
 に、今まで信心に怠りなく、朝暮燈明を照して、家内安全、息  
 才延命、富貴繁昌と禱た神棚、佛果菩提の爲と代々信心したる  
 彌陀如來、其外先祖代々の位牌までもヒツさらへて二階の片一  
 方へ放り上げ、内義が勿體なると、種々に異見しても聞き入ぬ  
 故、合口の隣の按摩に、御異見を頼みますと呼びにやれば、夫は  
 氣の毒、なにも後生じや、行て進じようと、早速に見へられ  
 て、マダ云ひ出しもせぬ内先方からの異見、さりどては貴様は



若達親切  
問端的  
不  
鏡君

文盲な人じやぞや、神や佛に化され、坊主神主に鼻毛をよまれ、朝は吐音加見依身多女、暮ると、なまいだアと、アツたら日間を欠て物も云わぬ神や佛に、助て呉の、息才延命じやのど様々のよまろ言、神も佛も銘々の心こそ神や佛なり、紙に書た大明神やら、木や金で造へた佛が何の間に合ます、皆ナ迷から様々事が出来る、私も此間まで阿房にしられて居ましたが、四海波先生の講釋を聞いて目が覺てきました、貴様も千ト聞きに行しやれ、と先を取れて按摩も、何でも一摺と思ひの外、凝がきたさうなど、日頃の信心者をサンザンにこなされ腹に居かね、サテ

〇〇〇〇〇〇

貴様は愚な人じやナア、神も佛もいらぬものなら、貴様より先に賢人が片付て仕舞ワイノ、其上御上から保存下賜金等の

有る寺社は無る筈じや、夫れを化されて居ると云へば、歴々の御衆も皆化されてゐると云ものか、其いけもせぬ四海波を取置て世間浪にならしやれと、青筋ばつての駁撃、仙兵衛も肩胛はつて、イヤ置しあれ、貴様の様な愚痴な人に何を云て聞かしたとて役には立ぬが、ヨウ思ふても見やしやれ、貴様の信心する死佛に燈明を上たり、花を立たり、線香焼香くすべたとて食ども云わ膳部を供へ、坊主をよんで、何を云やら知れもせぬ、アニヤムニヤに死人の戒名を呼立て、後にはなまいどてすあいだで、寄てたかつて囃子たどて成佛するやらせぬやら知れもせぬ事に有難の忝ないのと、涙流して嬉しがる、一向阿房らしふて成ものじやない、是我等が先生はな、知識長老でも先生の傍へ







なき昧にて、御見舞もふす仙兵衛様、御安排が悪いかと、云や云わずに、サテ昨日の貴様が云はれた言を内で能々考へて見れば、一つとして無理な事はない、如何様、神や佛にだまされて居ましたと少志をだてかけて機嫌のよい處へつけ込で、御風邪ならちと足先でも揉で上げませうと、足の腫たを見出そう爲に蒲團の内へ手を入るや、否や、モウ安排も能く御座る、夫れには及ばぬと足を蒲團でヒンまゐて尻込、内義が傍から、ハテ御心安い御方じや揉で貰ひなされ、日頃達者な時でさへ、按摩好じやにと、否がる者を無理やり、按摩が足の腫を見つけて、コレ、争はしやるな仙兵衛殿、片意地はつて、愛宕山の御花を踏れた罰が當て、足が腫てあると云へば、まだ負ぬ氣で、これ

は折悪ふ持病の脚氣が起つたものじや愛宕ぐらゐの罰が何で當るものじやと云へば、ハテ片意地な人じや、これ程足が腫て太ふ成たが目に見えぬか、と云へば、愛宕山の花を踏で足が太ふなるなら、愛宕山の花に小便しかけて、細いところを、太うしてもらふふ、トはサツテもきツい負惜み。

評 此一篇ハ、前説ヲ一層瞭然タラシメンガ爲メニ説示シタルモノニシテ啻ニ禪門ノ弊竇ヲ攻撃スルノミニ止マラズ、佛教各宗ト神道各派ノ迷信者ヲ喚起シ、眞實ナルヲ知リ得セシメント欲シ、説キ來リ、説キ去ル所、縦横無盡讀者潛心シテ之ヲ讀ムニアラザレバ、或ハ其趣旨ノアル所ヲ知ルニ苦マン、故ニ讀者匆々ニ之ヲ讀過スルコト勿レ。



○饅湯無冷處

僧、趙州に問「狗子に還て佛性ありや、また無しや」州曰く「無」と此話をふだん工夫するに有無の無でなく、虚無の無でなく、人に問ておれず、學文でいけず、何ともかとも知れにくいとなり、尤も推量で解するを情解といひ、ほんまに見得たを實悟といふ、此推量で済したる情解は役に立ぬとなり、今時に悟といふ人は多く推量ですましたが多いもので一休の「目なし草や」『一休噺』などを見ての早合點、情解までにもいたらずめつた無性に無とばかり思ひとりて、己が墮弱を活達の一休に擬し一休をむだらくもの、師と頼て「釋迦といふいたずらものが世に

出て、多くの人をまよはするかな」などと己が勝手のよいとばかりを云ちらし何見付た事もないに、念佛題目を誇り神も佛もないものじやと、人の信心をあざけり、己が愚迷を以て古人の心に引くらべ、最早釋迦達摩も一呑にした様に思ふて、やたらめつぼう、やりばなしの本來空の無分別を起して、唯何もかもない物じやと常にわれなしくと云て狂あるく人あり、傘屋見兵衛、我なしにとじ蓋と、内の嗅衆も、同じく無我にて、仕事の日間があれば基將基の跡では禪法咄し、何も知らぬ内の手間取をあい手にしての問答、采はらいを取て拂子とし、イザ賓主、わかれて何成とも問しやれといへば、手間取の中に少し小癩者があつて「正當恁麼の時如何」と問かけられ、見兵衛且て何と



いふとか知らず、聞聾きこ、つんばをして、何じやいもか食たたいかどの答こたへに、手間取かっ「喝いっかつ」と一喝をばけば、見兵衛早けんべゑ急いそぐひかど答こたへしは、いかさま可まか咲しきとともなり、其手間取てまどの歸りし跡で、左りどては賤いぢしい事を問ふものかなと我わが知らぬとは云いわずに、人を謗そしり残りし手間取のこを相手にして、こなた衆しゅうも随分ずいぶんと我わがなしといふものにならしやれ、一休いっぎゅうの歌に「やけば灰はいうずめば土つちとなるものを、何がのこりて罪つみとなるべき」とある、此歌をよふ會得あひとくさつしやれ、兎角とかく我われと云いやつめがあつては腹はらも立たつ、かなしみも欲よくも徳とくも是これから起おこる、我わがなしといふものを修行しゆぎやうすると、此身しんは自然しぜんと樂たのしみになる、譬たとへ、仕事をすると云いても、われなしでさへ仕事をすれば、きやうに成なつてはか行ゆきがすると云いは、そんなら手間代

もわれなしでくだされ、われなしで欲よくをはなれた手間代てましろでなければ役やくにたゝぬとの返答へんたよに、見兵衛は夫それがどこに我わがなしじや、仕事しごともろくにせず、手間代てましろをよけ取とは、それは我有わがといふものじや、信まことの我わがなしと云いものは、随分ずいぶん仕事を精出せいだして、手間代てましろを少すくのふ取とが我わがなしと云いものじやといつゝのるを手間取てまどは堪こたへかね、扱さく々さくこなたは依手えて勝手かつてをいふ人かな、仕事を精出せいだして手間代てましろを少すくのふ拂はらふと云いふやうな、こなたの勝手かつてをして利口りこうそふにわれなし顔かほさつしやつても、人が合點あつてんするものか、そんな手間てまどが有あら貴様きさまいかしやれど、やり込こめれば、内儀ないぎが笑止せうしがつて、モウ二人ふたりながらだまらつしやれど取とりさゆれども、言いつものつたる喧嘩けんわなれば、後あとには毆うやら打たくやら、散々さんさんのていたらく、手間



取は見兵衛を尻に引敷たばこ盆の火入で頭をくらわすやら、内儀がとりさゆるをはね飛し、くんずころんず叩合、我なし喧嘩の騒動に隣の親仁は飛で来て、マア静まらしやれと取さへて、喧嘩の起りを聞ば我なしからのことじゃげな、扱々見兵衛どのも年に似合ぬ若者をとらへて喧嘩するとは若輩千萬皆是銘々の意地をたてうとするから、我といふものが出てくる、何がこれが我なしじゃ、眞の我なしなら、人がどういふをふが取上ぬが我なしといふものではあるまいか、見兵衛どの、シテ頭が痛むか瘡はつかなんだかと、問れて見兵衛とりあへず「喧嘩する我なきものと思へども、頭たゞけば痛こそすれ」と西行法師が歌を思ひ出してのへらず口に手間取も商賣がらとて早速に「傘の

鏡 耕 重 磨  
 鑿 金 須 再  
 煉 精

天窓の疵は御免なれ、さしていたまざわれもなければ「隣の親仁もあかしさのあまり「こふはやう中がなをれば我もなし、もはや根もなしのこる葉もなし」先早速に中がなをつて挨拶に出たおれも顔が立て喜まず、見兵衛殿も手間取どのも、よふものを合點さつしやれ、惣躰悪とはいふに及ばず、善事でも餘り夫に凝といふと思ひの外の害ができるもの、こなたの我なしが悪いとではなけれども、眞のわれなしといふものは、なか／＼其様なものではない、遙に違ふたものじゃげな、今世間でいふ我なしはホンノ人そばへのわれなしといふもので、あまり我なしにかたよると、却て身のはめつとなり傘屋の家の破れとなつて、ついには身上たゝんで仕舞やうになるもの、さしかけてお



れがこふいふはいなものなれども、マアあれなしを止にして、  
 何かなしに家業を大切にすることが肝心の事、人の身上はひろげふ  
 とすぼめふと、頭に立ものゝ心次第、こなたがぬけめなふ精出  
 せば、手間取どのも自然と骨をおつて精出すやうになる、そこ  
 で互にはげみがついて、同じ仕事するのが具合のよい轆轤とお  
 なじとで、心よふするといふものじやによつて、ずいぶん商賣  
 を精出して傘の柄のながふ繁昌するやうに、見せを張のが肝要  
 と、蛇の目灰汁で洗たやうに、さつぱりとした異見如何さま此  
 親仁もつねのやつともおもわれぬ。

評 趙州商量ノ一語ヲ提ケ來リテ、大ニ我執ノ非ナル所以  
 ナ辨ズ、其輕々着想ノ妙、感スルニ餘リアリ、或ハ思フニ

本篇話頭ノ圓轉スル所、多少極端ニ走リタルノ嫌ナキニア  
 ラザレドモ、是レ蓋シ深甚ノ道理ヲ卑近平易ニ知ラシメン  
 ト欲スルノ意ヨリ茲ニ至リシモノニ外ナラザランノミ。

○髑髏前見鬼

何成が佛と、尋しを金、と答しは尤のやうなれども、此金ゆへ  
 に何方の苦しみをなす事か知れず、金故に命を取るゝ事もあれ  
 ば、佛たのんで地獄なりといへば、それは其金がなきゆへの  
 と、此佛さへござれば神通自在心のまゝ、壹圓あれば壹圓の極  
 樂、貳圓あれば貳圓の極樂目前にあり、有難や尊とやど、平生  
 爪に火をともし金銀をしこためる坐禪工夫をなさば、山事米市



手が合て、金銀錢の佛菩薩光をなし是では一生樂じやと安心決定する日があらんと、金好な和尚のはなしも、今時人の悦そくな勸かた、世智な様でも化され安き人心、常世は破れ衣でもいかぬ、小袖の上に絹衣で一と握みの手の内を貰て歩行く時節、一日歩行て米が何程取て小袖の裾の切れ賃に白切が何尺いつて何程と算盤はちつかしての算用、本に内證を聞ては愛想の盡たもの、誠に佛と云は、金錢のとじやといふもむりでない、昔から云どをり、地獄の沙汰もぜに、阿彌陀は錢程といふに嘘言なとはない、寺方に限らず醫者がたでも、錢のある人は學文がなうても療治が下手でも信仰のあるものなり、洛の西に山口北安といふ醫者あり、素より一文字もひけぬくらいの大文盲人なれ

櫻開向上  
一敷千聖  
齊立下風

ど、目盲蛇におじすと、按摩針立からのし上て、日用重寶記を人に讀で貰ての醫者、知たものは心元ながれども、世界は廣いものにて相應に南無天道で全快つた病人があれば、しくじつたとは隠しての手柄咄し、元來の高慢人にて内へ戻ると内義に内證はなし、外では云はれぬとなれども、全體醫者の藥で病人が快氣すると云やうな鹿相などはないもの、所詮藥で死るやうな病人ならば役にたぬ、たどへ藥違で死でからが向ふの命、ヒで殺すに咎はない、どかく醫者は病家あしらいが肝心随分銀持の所へたちまわつて病家さきでも、入婚と見たらば鼻の機嫌どり、婆々の巾する家と見たらば、祖母の機嫌の損ねやうにわしろふてまわるが醫者の上手と云ふものなり、どの咄し内義は



西陣のおへこ上りなれば下女と二人に兜羅綿とろめんはた織おして稼かせ錢せんといふとめつたにつかみたがる、内うちは常精進じやうしやうじんして歡喜天くわんぎてんに福いのりを祈いのされども、元禪寺もとぜんでらに奉公ほうこうせし人なれば禪法ぜんぽうのとは少々耳みみに聞きはつり、手に腫物しゅぶつの出来た跡を見せ、手前てまへが前まへかた座禪ざぜんいたせし時、腕香爐うでかろうをたきましたと、禪ぜんの咄はなしをすると一番いちばんにひじをまくつてみせ、嵯峨さかから等持院とうぢいんで講釋こうしやくをなされた蓮花れんげ和尚おしやうを歸依きえし、講釋こうしやくの度毎たびごとの聽聞うりもん、素もとよりかな本ほんさへ見得みえぬとなれば、况まじて舛またの底そこのやうな四角しかくな字じは見へねども、字じが讀よぬと笑わらわるゝも口惜くちおし、讀よぬ本ほんを傍そばに置おて佛ほとけのぜんに座ざた様ようにして、折々せつせつは和尙わしやうに御目ごめに懸かり、御示ごしめの上うへで一側ひとへの公案こうあんを授おんりて療治れうぢの外ほかに坐禪ざぜんの工夫くふう、悟さとさへすれば讀よぬ本ほんでも讀よるとと、上根じやうこんに座禪ざぜん何

澹板漢

の見開みひらたとはなけれども、餘あまりに座禪ざぜんに氣きを傲こらすを和尙わしやうも不憫ふびんに思おもひ、賞ほめてやらざば氣きでも違ちがふかと、こなたの禪法ぜんぽうは餘程あま上ありました、手前てまへに大勢たいせいの弟子でしはあれども、貴様あなたのやうな見開みひらいた者ものはないと、のせられて、扱あは我等われらはもふ悟さとて居いそうなど思おもひ、療治れうぢ先まにて禪法ぜんぽう咄はなしし、嵯峨さかの和尙わしやうも拙者せつしやが悟さとに呆あはれてござる、法義ほふぎの事ことなら何時いつでも御出ごいでなされ問答もんたふ仕つかまつらんと、自慢じまんたらく、夜前やぜん一夜ひとよさ寝ねずに座禪ざぜんいたしましたが、日月にっげつを目めの下したに見みあろした、扱あ々怪あやふからぬとじやと和尙わしやうの講釋こうしやくのかたそつへらを聞きはつり、己おのが忘念もうねんより感あたるとを悟さとりと思おもひ、見みるを見み真似まね、聞きを聞きまねに禪坊主ぜんぼうずを見みつけると、いかなるか是祖師これそし西せい來意らいい、と問答もんたふしかけ、内證ないしやうぢ知らぬ人ひとは一ツ二ツ云いて見みても、後



には論ずるにも足らぬ阿房らしいとばかりなれば、禪僧も呆れて返答せねば、また貴僧は修行が足らぬと笑ふことおかしけれ、禪法さへすれば醫學も自から出来る様に云ども、今に至て文字も讀ず、先あし元の家業とする醫學のとは一向學もせいで、我勝手のよい學文なしに修行の出来る不立文字をい、散し、肝心の我身を養ふ醫術のとはそでにして富貴に諂ひ、手練を専らとして人の物をだましてしてやる巧み、いかに向から頼めばとて、人の命に預る醫道を大切に思はず、いけもせぬ禪法を自慢すると、因果をも思はざるかと物知人は内證で笑へども、知らぬが佛に成たやうに、高慢の鼻をひとつかし、内の内儀は氣の毒がつて、天魔がみいれて長い鼻にはならぬかと、顔はつ

かりをながめて、どうやら思ひなしか、鼻の先が尖つて長ふなつた様など、是を苦にしての病氣、だん／＼重なつて今はの期に北安が手を取りて涙を流し、私はどうで死で行ます、おまへの自慢の禪法をどうぞ止にして下さんせ、ひよつと天魔が見入て天狗にでもなられやんしようかと、夫ばかりが按じられ、未來もやう浮みませんと、しみじみとの異見、北安目に角立て、何ぬかすたわけめが、此生佛のやうな北安に何で天魔が見入るものじや、其天魔これへ出せ、一つかみにして呉れる謔言いふなどいふ儘に、拳をにぎり内儀の頭を三ツ四ツくらはせば、下地疲れた病人なれば、其儘息たへたれども、負惜みに泣もせず、病人の頭をくらわしたるとを外々での吹聴何も知らぬ人は、む



跳龍門魚  
落漁人手  
活盡死人

ごいと思へども、迷て居る愛着の念を断ん爲にくらわした、此やうに道ぎつたとはなか／＼初心な禪法では出来ぬ事との自慢、おなじとなら、死ぬ先に此念をきつて、去でもしまわれたがよからうに、むごたらしい死か／＼つて居る女房の生顔をばるとは、天魔の見入は愚か、鬼の見入てあらうか昔も知識が我母親を足でけられた事もあればと、我が勝手ずくなとばかりを見真似に、鵜の真似する鳥にも劣たると、蓮華和尚ももてあまし給ふならんと推量にちかふまじ、さればこそ、一千七百則の公案、其外語録に載たるあるとあらゆる公案もやう／＼として一二則さづけ給へども何を見徹したるともなく、推量の情解も出来ぬ位、心に何の思惟する事もなく、めつた無性に悟自慢、

死盡活人

後には、かの難問の、世界の石の数を算へ來れと云れて、即座に世界の石のかずは唯一ツ、とキツと見ひらいたとの返答、和尚もほつともてあまし、賞めもせず誇りもせず、たゞそのまゝに「北方の北なんぞ」と仰られしは、禪法を止たがましとの御詞か知らん。

評 盡大地、見來り、見去レバ、何者カ是レ禪ナラザルモノアラシ、彼レモ禪ナリ、是レモ禪ナリ、一切諸法、皆是レ禪ナラザルハ莫シ、夫レ然リ、然ラバ即チ資生産業、汲水採薪、語默動靜、行住坐臥モ亦タ是レ坐禪觀法ノミ、山秀テ、水清ク、鹿嘶キ、狼吼フ、鳥囀リ、虫吟スルノ状ハ、是レ豈ニ公案ニアラザランヤ、此一篇能ク儀式的ノカラ禪



學者ノ妄見ヲ喝破シ、眞實ナル禪學ノ針路ヲ示シ得テ妙ナ  
リ、思フニ是レ世ノ妄想禪學者ノ三十棒ト爲スノ價値アリ。

〇泥裏洗フ土塊

過しは昔そのころ先生達の本心を知と云ひ玉ふゆへ、靜なる所  
へ這入座禪して見に心と云ふものは丸いものかと思ふて見れ  
ば、日月をはじめたらい炭がさ、茶碗の類まで思ひよれども、  
是でもあるまじと、又山の様なるものと思ふて見れば、富士山  
から淺間山までちらつき、阿蘇、鳥海、白山のあたり目にちら  
くする故、いやくこれは海川の様なものかと思ふて見れ

ば、帆かけ舟に獵師舟、百石、千石とまり舟、所々の海河の往  
來のみ思ひ出され、いやく是も心と云ふものには有まじ、兎  
角心は空なるものかど、なにもないど心を按じて見れば無とこ  
ろなれば按じて見る所もない筈、されども今日天地日月、山海  
草木、人間かくまざくとして有からは、無とも思はれず、ま  
たないど云ふて見れば、先生が烟草盆などのふち叩て見せらる  
ゝに、耳がきくか、心がきくかといひ玉ふ、種々として見るに、  
耳をふさげばきこえず、さすれば耳はきかず、心がきくかと思  
へば耳よりきかねばしらず、心はものに應じて生ずれば、無よ  
り有を生ず、その生ずる心はと云へば、とんと雲を暗、いつまで  
も迷暗の凡夫にて是では濟ぬと思ひたり、ある山中に大瀧あり



點鐵成金  
點金成鐵  
好箇班々  
瓜牙未備

ければ、これへ行き不淨よそぎの身もすゝぎ、心こゝろも洗あらひなば明かにな  
るべしと思ひ、親おやき友ともをかたらひて此よしを申しければそれは  
殊勝しゆしやうなる事かな、併しかしあの大瀧にてうたるゝと、昔よりためし  
なし、貴様の手足身うちをば繩なまにてくゝり引ひぱりいるべし、一  
日に二度か三度かど云へば、いや／＼百日と思ふなり百日にて  
埒ちちあかずは二百日、もし二百日にて埒あかずは一年、二年、三  
年にてもうたるゝ存念ぞんねんなり、それはならぬ事にてやはべらん、  
文覺もんかくさへ七日うたれしといひしに、なにどしか左やうの事あら  
ん我等も一日か二日の事ならば繩なまをも引ひぱり居ゐらるれ共、一年  
の二年のと引ひぱり居ゐる事もならずいかゞすべき、よし／＼とて  
も山中の樹木じゆもくにくゝり付つおき、折々見みまひ申まべし、心安くおも

はるべし、とは云ふものゝ如何しても願ねが成なり就す覺め東あづまなし、さり  
ながら思おもひ込こめし事ことなれば、いかやうともいたさるべしと、や  
がてかの奥山おくやまの、鳥かも通かぬ峯みねをこゑ、瀧壺たきつぼの傍そばまでは、中々よ  
りもつかれず、半町餘なまもわきままでは連立つれたちしが彼の男おとこはやが瀧  
のかたへ行き水烟みづけりにて見みえず成なければ、彼かの繩なまを引ひぱり、しか  
と大木やいばくにくゝり付つをき、毎日見舞みまひひ綱つなを引ひて見て、引ひばれば無  
事ことなる事ことを知しりて歸かへりけり、扱さかの男おとこ丸裸まるはだかになりて瀧たきのおつる  
巖いはの上に大安居おほやすらかいて合掌がっしやうし、頭あたまからうたるゝほどに、身しん躰たいど  
ぶが如ごとくおもひ入いたる事ことなれば、晝夜ちゆうやうごきもせず居ゐたりけ  
る、さて今日けふにて十日じふにちになり、あしたにて廿日はつかになれども返かへら  
ず、彼かの綱つなひかへたる男おとこ、毎日見廻みまわけるに、彼かつな同じく引ひば



人情傲得  
冤家結得  
細載而往  
垂業而歸

りくゝり付たり、さては今日も無事なる事よと思ひ歸りては見  
まる、毎日見廻て綱を引ばり、試見てかへりけるが、また行て  
綱を引けるが、いかゞしたりけん、かの綱つるゝとひけてた  
ぐりよせたり、さては久しく断食してしのぎ難く死したるか又  
は抜失たるか、或ひは流れてうせしやらんと思ひ、瀧の傍へよ  
りたれ共、水けふりにて中々近寄事かなひがたく、霧のうち  
のやうにて見へわかず、併この男もいかゞ思ひけん、人も我も  
同じ事なれば、いかなる大瀧大河なりとも人のせし程の事はな  
るべきと思ひ、やがて瀧のうちへ飛入ければ、さきにうたれし  
男と見えて、皮肉ことゝく流れ去て、なき骨ばかりは瀧にう  
たれて有しなり、彼の男いふやう、汝いまだ白骨となつてなを

瀧にうたるゝかど掌を以て一打うてば、はらゝと成て失にけ  
るが、彼の男は引残りたる綱に乗かど見えしが、急ち綱は大蛇  
となつて、彼の脊なかに打乗何所ともなく失しとかや。

評 顯ニシテ幽、動ニシテ靜、起伏開闔、玄妙靈活ナルモノ  
ハ吾人ノ心ナリ、此ノ如ク玄妙靈活ナル心ヲ統理スルコト  
豈ニ其レ容易ナランヤ、之ヲ以テ世々聖賢出デ、説ク所ノ  
教ヘモ亦皆ナ吾人心性ノ實究統理ヲ指示スルモノニ外ナラ  
ス、以テ心ヲ統理スル事ノ至難ナルヲ知ルニ足ルベキノミ、  
此篇心ノ統理方法ヲ平易ニ指示シテ餘蘊ナシ、若シ夫レ心  
法ヲ實究セント欲スル人、思ヒ潜メテ此篇ヲ讀マバ心法ノ  
本源ヲ究量シ、心性ノ統理モ亦タ敢テ難カラザルベキノ



○劔握テ飯ニ人手ニ

古語に曰く、武夫ぶと以もつて武失ぶしつ文者ぶんしや以もつて文失ぶんしつとけ誠まことなる哉、今時こんじの書生しよせいを見るに、史記しき左傳さへんの端はしを少しのぞき、唐詩選たうしせんの絶句てつこが一  
 二首いちにもきりぬきが出来ると、はや大學者だいがくしやの氣きになり、學文がくもんせぬ  
 人は風塵客ふうじんのかく、いや俗物やくぶつのど見下みくだし、其上そのかみに世説せせつを五六枚ごろうまい誦よみで晋しん  
 朝風てうふうの卓落たくらく不羈ふきが面白おもしろく、只何事ただなにごとも人世じんせい適意てきいとやりすて、元來げんらい  
 好物こうぶつの淫酒いんしゆにふけり、又甚またしきに至いたては左ひだりにお花はなを握にぎり、右みぎに  
 金牌きんぱいをとりて、袁玄道えんげんみちが一擲てき、斯このの如ごとくなんとしたわけを盡つくす  
 よりも、やはり味噌みそは味噌みそ臭くさく學者がくしやはいかにも學者がくしや臭くさひがよふ

御座ると、四角四面しかくしめんに身をきりつめ、古文具寶燧石こぶんぐほうすいしの吸物すくものに、  
 野呂摩のろまの玉子閉たまごどじを鹽梅あんばいして、子しの曰たまはく、味の味あじもよほど喰くかじつた顔  
 の、名なにあふ紺屋町第五丁目こんやまちごだいぢようめに、野呂屋のろや萬右衛門まんえもんとて家僮かどう五六  
 十人じゅうにんも仕つかひ、近邊きんぺんに並びなき大の貨職者しんたいしやなりしが、其癖そのくせに金遣かねづか  
 ふ事ことを知らず、夢ゆめにだも芝居しばゐを見ず、嘶ほなしにも吉原よしかはらをきかず、た  
 明暮家業あけくれかごうがいじ大事だいじに金かねためる工夫くふうの外ほかには一行かうじやう有ある餘力あまりのちから以もつて學まな文ぶ  
 を樂たのみとせり、一子いっしの野呂藏のろざうとておなじく顔長かほながに律義りちぎなる生うまれな  
 りけれども、親心おやこころには大器者たいきしや晚成ばんせいすと、あまり子供こどもから伶俐りれいな  
 は却かへつて生長せいじやうの後のちそれほどにないものと、女房にようぼうさんまひもしそふ  
 な子をとらへて、また年としがいたら適利あつぱり利發りはつにもならんかどの樂がのし  
 みは、子故こゆゑの關かみとぞ知られける、されども灑掃應對進退さいそうおうたいしんたいを教おしら



れしに、律義一篇におぼへ、朝暮おこたらず勤ければ、萬右衛門悦び大方ならず、我身上、石に根つきとは此事なりと自慢せられ、はや年頃とてある富家より嫁を貰れしに、この嫁、天のなせる麗質にて、とに一昧才發者なれば、ト野呂藏には過ものど、内外の人も評判せり、萬右衛門ある夜つくくと思ふよふ、我如く大勢人を使へば自ら下の情上へ達し難く、また手代共の姦邪を爲もはかられず、これを詮よふやあると案じけるに、フツト陶堯の諫鼓を出して諫を容たまひしと思ひつき、夜が明るやいなや思ひきつて、大太鼓を買よせ、臺所の真中に居へおき、高札をそ立たりける「一於ニ我家事ニ不レ依ニ何事ニ所存有レ之候輩者可レ打ニ此太鼓ニ申所於レ有ニ其理一者可ニ褒賞一者也仍如

唐突回顧

件」と高札を出しければ、手代をはじめ下男迄、あはれよき御爲の事を言上げ褒美にあづからんものと思へども、日の中は勤せはしく、考もなりがたければ、夜に入と我もくど只此事のみぞ案じける、下働に元は日雇の守なりし權八、一了簡を考出し、臺所へはしり行き、ド、ン／＼と打ければ、折しも萬右衛門は夜食を喰ふて居られしが、太鼓の音を聞くより、口に含しを吐ながら、麻上下を着し、さも嬉しげに出らるれば、權八唐犬額を疊にすりつけ、憚ながら、ちと御爲づくを存付ましたから善悪まあ言て見るので御座ります、尤も當年は久しく天氣がかんまつとやらにて雨といつチャア、から、むたい一粒もふらぬエから、ゴロリとも、ならしやりませぬが、もし自然御



寸步却成  
千里隔紛  
々多在半  
途中

雷かみなりともいつたら、こんな結構けつこうなおやか骨ほねへもがら／＼と落おちメエもんぢやアごんせぬ、すると大きおほに御破損ごはせんで、いかる御物ごものが入いませう、そこで私が思おもひ付つは、ちつと御ごてエそうなこつたけれど、此御家ごういへのらくに這入はいほどの蚊屋かやを作こらへて、すはゴロリとも言いとき其蚊屋かやを温和おんわに釣つかけたら、どんな御雷かみなりでも、委い細さい不構ふまといふ身みで御座ごりやしやうが、まあ此智罫このちりやくはなんとどでこんしやう、と片言かたごだらけに、万右衛門手まんえもんてを打うて大おほに感かんじ、不耻かたじけ下問げもんとは夫子ふし之の金言きんげん、是萬全ばんぜんの計はかりなりと悦よろこにたへず、如何いかにも汝なんぢがいふ通り早々蚊屋かやを申付まをん、先當座せんとうざの褒美ほうびよとて、前巾着まへきんちやくより小粒こつぶ三百疋ひゃくやり、其上そのうへに禹善言うせんげんを聞きては拜まをす、と師しの禮らいを以もて權八ごんぱちを拜まをして奥おくへぞ入いられる、扱臺あつかい所ところにては權八ごんぱちが

怪得香魂  
長入夢三  
生骨肉是  
梅花

褒美ほうびを浦山敷うらやましく、おもひ／＼に案あずる内うち、田舎這出いなかはいでの水汲みづくみ太郎たろう助すけ、一丁筋ひつてらげんをくみ出し無二無三むにむさんにドン／＼といはせければ、此時このときは萬右衛門まんえもん翌あすの用事ようじのたすけとて、髮結かみむすふて居ゐられしが、此音このねを聞きよりも油手あぶらてながら上下かみしもを着き、片手ひとてに髻ももこりを握にぎりながら出い出る／＼に、太郎助たろうすけ、アイ御旦ごたん那樣やう、お憚おほながら私わたしも一丁筋ひつてらげん申まをますべい、まづは最前權八さいぜんごんぱちどんの申まをされましたで雷かみなりの御用心ごようしんはザツトようごんざり申まをが、モシア又またでツケエ大地震おほおほがゆすぶり申まをたらこんな、でかばちない御家ごういへでも、でつくりかへり申まをべい、ほんにマアそうならケアに魂消たまけ申まをべい、そこで拙共せつどもが愚案ぐあんのサアめぐらし申まをに、元大地もとたいちがぶちはれ申まをから、家いへもでんぐりかへり申まをべい、又大地またのぶちわれ申まをも、一躰地面いつたつちめんのき目めのわるひから



で御座り申によつて、冬にもサアなり申たら、蜜柑や柚なんどを五六十樽も買込召さつて、こなこみぢんにおつこづいて、椽の下から家の四角へぶちまくだ申、それでもまたぶちわれ申て胼胝のとくになり申なら、お外科衆の安能膏とやらを三樽計もかひつくかの、われめへツ、こんだら、いかなハア大地震でも、御家は御年貢をしまふたころもちでござり申そう、となまりちらせば、萬右衛門又大きに悦び、先は地震の愁もなしと、又三百疋やられ、奥に入り髪などしまひ、トロくど寝られし時分、又たドンくと寝耳へ響ければ、早速飛起出らるれば、今度は手代見習を勤め、かねく十露盤の片手には、四角な文字を二三角ほどはおしえられし調市あがりの忠七なり、謹

而申様私儀はまだ年若ものにて、箇様の儀申上候も恐多くは候へども、又存付候義を不申上も、腹ふくる業とやら申候得ば、おそれを不顧申上候、先雷地震の御用心は随分可然候へども、若又盜賊など、申候は御心掛被遊候や、と申ければ、萬右衛門嘆息して、我此事を思て寢食をわする汝幸に能き術あらば早々教よとありければ、忠七畏て、尤も御金庫に番人共も被指置候へども、人金鐵にあらざれば眠るまじきにあらず、又其内に盜路が徒あるまじきにもあらず、こゝを以て私の存候は、先御金藏の中へ大きな水船を拵へ汐をくみ入、扱随分達者そうなる大蛸を十四五箇生洲に被遊、被差置なば、萬一盜人入とも、足手に吸付からみ付、可申、左候へば、



群陰剝盡  
一陽生草  
木園林盡  
發萌

是人力を不<sub>レ</sub>費、盜人を生捕算用、且番人の扶持給金を御費もな  
く、一年に積て見候へば二拾七兩と拾五匁八分の御徳用と、實  
に十露盤のたまがなる、手代の智慧を噫呼がまし、萬右衛門嘆  
じて曰く噫智なるかな才なるかな、誠に後世可<sub>レ</sub>恐どのたまひ  
しは汝がとなり、今の工夫を聞しより我心雲霧を開て白日を見  
るが如しと、甚だ悦び、其夜すぐに忠七を番頭にいひつけ、其  
上に小判を三枚くれられたり、是より諫を入るもの日々夜々に  
多く、後には奥に入て寝ると、ドン／＼、寝ると、ドン／＼に  
一向眠る間なく、段々心根も疲れはて、哀なるかな萬右衛門、  
つゝに諫鼓を冥途の早鼓とし諫もきこぬ遠國へ宿がへせられ  
ければ、一家の歎き大方ならず、わけて一子の野呂藏は悲の餘

眞即實實  
即眞

りに狂氣の如く、持たる撥をば劔と定め、親の敵は此太鼓と打  
ては歎き、歎きては打歎きながらもつく／＼と思ふ様、我親い  
らぬ儒を信じてかく如く生涯を誤まる、是憎べきは儒の道なり、  
いかに人が孔子の又臣弟といふたりとも不幸短命にしてなに、  
かせんと、思ふより頻りに老子を面白く思ひ誦たりしに「大道  
廢有<sub>二</sub>仁義<sub>一</sub>智慧出有<sub>二</sub>大偽<sub>一</sub>」といふに至て、書を投て嘆じて曰、  
嗚呼我老子を見るところのなんぞおそきと、それより仁義は大道の  
廢しよりおこるとあれば仁義と云ふものは惡ひもの、智慧もい  
つはりの初めなればたゞ教の如く、愚を守るかよと思ひ込む  
より、一躰の馬鹿に金覆輪をかけたけりける、手代が手をついて  
旦那／＼とあしらへば、コレ／＼禮義はもと偽の初めにて大道



にかなはぬ、手を上てらくに居て用を云やれといひ付れば、茶坊主はこれを能い事にして茶を運ぶにも臺にも載ず、立はだかつて出せば、大ぶん小僧が大人しくなつたと賞め、下女が膳をすゑながら側にある多葉粉盆を足でのけるを見ては、夫でこそ自然の道理なれと悦び屁をひとつも無爲でなければすまぬと口癖に人にも言聞せける、或時は女房をともしひ芳町へ行て買せ、又は手代を吉原へつれて一座に遊びければ、女房も手代も段々學文上達し、女房は居續をし手代は扱懸してもかまはねば、見るを見まねに下女のお玉は杓子顔の飯焚とふずくり、針妙のおぬひは手代の頼助とてころびあひ、青梅をこのめども是自然と不構、かくする程に、後は次第に高じ、女房は姦夫をこし

らへ内へ呼で樂み、手代は圍物を旦那の物でやしなへば流石の野呂藏こたへかね、品川鯉を見る様に面ふくらして、叱て見ても、女房手代は兼てより旦那氣取をぐい吞にして竹篋がへしにいひ言は、野呂藏はひそくとたまり兼「天下之至柔馳騁天下之至堅」舌は和らかきを以て長く不腐、齒は堅を以て早く闕くと、つぶやく心から、さしもの身代もだんく左前なれば、素より無頼の女房にて、斯る所に長居は無益、持參の道具のなくならぬ内と去狀を貰ひ親元へかゑり、すぐにかの姦夫へ縁組するをもかまはねば、友達が來て氣の毒がり、是野呂藏いかにかまはぬとて世間がすまぬが、どうむやといへば、我豈榮辱にかはる人ならんや、我はこれ方外の人也、かれがわれを捨てむ



かふへ行たは、是我に薄して彼れに厚きの道理、天に風雨あり年に四季あり、これもの、變ずる事も天地自然の道理なんど、くだらぬ利屈を並べたつれば、友達も呆はて、こんなたわけが唐にもあるかと鼻唄にて出行けり、夫より段々身代迫りし上に、手代共の我もくくと引身しければ、さしも親萬右衛門の蓄おかれし金銀家藏、のこらず人の物となりし上にて、はじめて老子を悪く吞込し事を悟り、後悔あどへも先へも行ず、終に裏店の住居となりしは、日本無雙の野呂摩殿。

評 佛教ト云ヒ儒、道ノ兩教ト云ヒ、其最極ニ至リテハ人間ノ行爲ヲ戒飭シ、道義ヲ上進シテ、以テ人間究極ノ目的ヲ知ラシメント欲スルモノニ外ナラズ、然ルニ世上ノ狀況ヲ

觀察シ來レバ、人々教ヲ信シ、道ヲ學ブ所、概チ妄見ニ纏縛セラレザルハ無キヲ見ル、豈ニ慨歎ノ至リナラズヤ、本篇ハ儒、佛、道ノ三教ニ涉リテ其道ヲ學ビ、教ヲ信ズル者ノ妄見ヲ彈破シ、以テ正見ニ啓誘セント欲スルノ趣旨ナリトス、其篇中ノ説多ク孔、孟、老、莊ニ涉リ過ギシ所アルモ糾量來レバ、唯釋、孔、孟、老、莊諸教ヲ信シ學ブ者ノ誤想ヲ彈斥シテ、眞實悟道ニ入ルノ方針ヲ指示シタルモノナリ。

### ○水流元入海

是もなく非もなし、もし是非あると論せば他の説も一是非な



り、我説もまた一是非也、我と他と何ぞ異ならんもど一なり、これを知らざる人は是非を争ひいさかふはおかし、釋迦如來の説ける經は皆々一理の筈なれども、宗旨にいろくありて我宗旨は是にして他の宗旨は非なりと思へり、一人して説る事に是非のあるべき様なし、聽たる人の了簡が違ふによりいろく變る事なり、必ず是非をあらそうべからず、むかし揚子といへる人あり、其隣の人我家に飼たる羊を失ひ家來をみなく率つれ、其うへに揚子の下人までも請かりて羊を尋に出る時、揚子曰く、一疋の羊を亡て追人の斯く多きや、隣人の曰く、路筋いくつもある故に手分して追なりと云捨いできり、や、暫くありて歸りたる時に揚子問て曰く、羊を獲たりや、隣人の曰く尋

會

得ず、揚子曰くはく奚尋ね得ざる、隣人の曰く道筋の多は兼て合點したり、そのうへにまた岐たる道筋あり、我是に迷ふてゆく所を知らず、曰く夫ゆへ歸れりと申せば、揚子聞て憂る顔つきにてものを言ざる事二時ばかり、笑ざるは事は終日なり、揚子が弟子ども此様子を見てあやしみをなして問て曰く、羊は賤き畜なり、そのうへ餘所の羊なり、言はず笑はざるは如何、揚子聞て何ども答へず、其弟子の中に孟孫陽といふあり、出て相弟子の心都子といへる人に此事を委細に告げる、心都子此事を聞てあらかた合點ゆきければ、ある日、孟孫陽と同道して揚子が前に畏りて問て曰く、昔兄弟三人あり齊魯の間を遊學して往來けるが、よき師を求め得て三人一所に學文し、仁義の道を得



徳して歸りけり、その父の曰く仁義の道いかん、物領が曰く、仁義と申ものはまづ我身を愛して大切になし、名を得るは後にするなり、二男の曰く仁義と申ものは我身を殺してなりとも名をも得るやうにいたすなり、三男の曰く我身をそこなはず身も名もならびに全からしむると申けり、此三人の仁義の心得相反たれども、おなじき儒に出づ、いづれが是いづれが非なるや、揚子が曰く、河の邊りに住居して不斷水に馴ならひ泳ぐ事を鍛練し、舟渡を家業として多くの人を養ものあり、隣國より聞つたへてこれを替古にきたり晝夜を分ず學で反て溺れ死するもの半なり、泳ぐ事を學び習ふて、溺るゝ事は習はねども、利害は斯の如し、若いづれか是、いづれか非と思へる、心都子聞ても

定則不二  
二則不定  
客來須看  
賊來須打

のをいはずして出づ、孟孫陽も續て出て心都子を讓て曰く、吾子が問は迂なるを以て師承の答も僻り、聞し吾は惑ひいよ  
 甚し、心都子が曰く道に幾筋もあるを以て羊を失なふなり、學者も道の多きを以て生を喪ふ、學は本同じくして本一なれども、末の異なる事は斯の如し、唯同に歸して一に歸れば、得る事もなく喪ふ事もなし、子は先生の門に長じて先生の道を習えども先生の情に達せざるは哀ひかなといえりと有る、世間の是非を争ふ人これを知るべし、また昔、宋といふ國に狙つかひの翁あり、狙を愛がりて多く養えり、狙の意をよく解て常にさからふ事なし、狙も翁が心を知りてたがふ事さらにあらず、翁もふびんがり我喰ものも喰ずして狙に喰せぬ日はなし、本より貧



なる家なれば俄にして食物置、翁思案を出し、狙の食物に限を定て、僅なる食物にて養ひおかんと思ども、衆の狙が怒りて己に馴まじきかと思へば先、狙どもを皆々よび集て言けるは、我は元來貧家なり、とに此ごろは飯米にとかけり、夫故若等にも今まで如く食物を興る事成がたし、明日よりは橡の實を朝飯に三つ、暮の飯に四つ與ん、これにて足べきか足ずとも暫く堪忍せよ衆くの狙これ聞てみな一度に起て大に怒る、翁俄も思案して然らば、若等に橡の實を朝飯に四つ、暮の飯に三つにせば足べきかと云へば、衆くの狙ども皆々伏て喜びけり、これにて萬事を知るべし、造物といへる翁あつて釋迦孔子と云へる橡の實を世間の愚なる人に與たり、佛も儒も一理にして、朝に三つ、暮に四つ、朝に四つ、暮に三つ、とかはりたるなり、然に佛者は儒を誇り、儒者佛道を破す、この人は皆衆の狙の怒るに同じ、また佛者の中に八宗九宗と別れたる時は、釋迦は狙つかひの翁にして、八宗九宗は橡の實なり、淨土宗は法華宗を笑ふ、みな朝三暮四を知らぬ衆狙なるべし。

評 此一篇佛者、儒者等ノ顛倒妄見ヲ排斥シ、別ニ正見ニ到達スル次第ヲ知ラシメシモノナリ、但シ篇中ノ説ニ依レバ儒ノ見解ヲ以テ佛理ヲ括統シタル所アリ、讀者潛心シテ



之ヲ讀マザレバ或ハ誤マラン。

○天ハ高ク群象正

斯こゝに南華なんくわの恬憺てんたんのみを面白がり、何事も造物者ぞうぶつしやの命いのちを受けて生るいけなれば、これを勉励つとめほむは天命てんめいに逆さかとのみ堅意地かたいちに覺おぼへたる族やからあり、一通りひとこほは尤ななれども愚おろかなるものは是こゝに陥おちて、みな物草流ものぐさりゅうとなるべし何事も天命てんめいとて時節まじ到來きたを待まちのみならば、誰たがむつかしひ事ことをつとむるものあらんや、卞和へんくわが玉たまも人力じんりきを以もつて磨みがあげてこそ夜光やくわうの寶玉ほうぎよくとはなれり、天命てんめい次第しだいとて轉まろをかば、いつの世よに獨ひとり光ひかりを顯あらすべきや、卞和へんくわが楚その厲王れいおう、武王ぶおう二代たいてまつに奉たてまつりしを石いしなりとて捨すられしは命いのちと云いべし、文王ぶんおうのとき玉人ぎよくじんの玉たまと見みつけ

たるも猶命なほいのちといふべし、若も卞和へんくわが心に誠まことの玉たまならぬを偽いつはりて君きみに獻けんじたらんには、捨すられ用もちられたりとも天命てんめいとは云いべからず卞和へんくわが心に一毫いちごうの私心ししんなく、兩足りゆうそくは斷きれても只ただ此玉こゝろのたまを空からしく棄すてかん事を殘念ざんねんに思おもひ、また文王ぶんおうに奉たてまつりしゆへにこそ、天下無双てんかむさうの玉たまとはなれり、是こゝ卞和へんくわ、己おのれを盡つくすと云いべし、是こゝにおゐて研ひて光ひかりの出いたる所ところは猶なほ人力じんりきなり、人も己おのれに何程いかほどの才智ちさいありとも、學問がくもんの巧たくまなくばこれを擴ひろむる事ことを得えんや、天命てんめい次第しだいとて今時こんじの人幼とら稚ちの時ときより棄すてかば、つゝに碌々ろくろくたる庸人ようじんにて一生せいを経よるのみにあらず人欲じんよくに蔽おほわれ味あじされていかなる悪行あくぎやうをもなすべし、天命てんめいの心得こころえ違ちがひにて一生せいを誤あやまるべし、その上うへ莊子しやうし秋水篇しゅうすいへんに「何謂なにをいて天てん何謂なにをいて人じん牛馬四足うましよばし是謂こゝろをいて天てん絡らく三馬首さんばしゆ一穿いつせん牛鼻うしびし是謂こゝろをいて人じん」しか



れば莊子もあながち人力を捨よとの教ばかりには非ずと見へたり、馬牛の大きなる體を持って生れながら人のつかひ者じやと心得、人もまた恐ずして見なれて、犬猫同前に思ふ、もし彼の大獸山林に吼嘶はじめて見たらんには、誰か恐れざる者あらんや、其を執へんに彼も又角を觸齒を鳴して容易手どりに成がたかるべし、人家に生じ人の養を受るをもつて渠も人に順ひ、人も心安く思ふは天命自然なり、しかりと雖も、牛の鼻をも通さず馬に銜を掛ずしては用をなすべからず、故に彼の人力を用ひ鼻を通し銜をかけて遣なり、人力を盡しくても其甲斐なき時こそ天命とあきらむべきのみ畢竟前に云族は、物草太郎を先生と仰ぎ、只引込み思案のみの工夫と見へたり、左あらば、人の喰

三冬枯木  
秀九夏雪  
花飛

する時のみ物を食、喰せ手なければ三日四日も喰ずして野倒死をするとも是天命と責て堅意地をはり通せば未也、左もなくして朶頤時にもものを喰ならば、無用の贅言とやいはん。

評 本篇ハ莊子ノ見識ヲ以テ儒道者流ノ天命ヲ誤解シ居ル所ヲ攻撃シタルモノニシテ、佛道ノ禪理ニハ全ク説キ及ボサ、ルモノ、如クナレドモ、其説ク所、稍々禪理ニ近キ所アリ讀者眼ヲ刮テ見ヨ。

○淨穢閑家具

垂柳子、順の一字を以て一生の受用とす、莊翁問て言、汝が平生受用する順の字の義理はいかん、垂柳子が言、順はしたがい



逆らはざるを道とす、剛ものは折やすく柔かなる物は破れ易し、柳の枝に雪折のなきは剛にも非ず柔かなるにもよらず、順の道をもつて逆らはざるゆへ也、我は逆なるものに對しても順の道をもつて逆らはざれば、彼が逆は逆にして我順の道に害なし、萬事の上に付て順なれば物と逆らはず、逆らはざれば争ひなし、争ひなければ人に恨られず、平生和平安穩にして一生身を全す、我順の一字を受用するは此ゆへなり、莊翁の云、汝が生涯の受用もつとも至極なり、しかれども未だ盡さざる所あり、それ順は逆に對するの名也、水火善惡の對待するが如し、汝順に執着して逆を惡むに心あり、順逆二つながら忘れて平等一般の地に居て世間順逆の境界を見よ、本來順もなく逆もなき事を

自得して、順の字に縛られたる自縛の繩を脱するのみならず、順逆を是非するの心病天然と治すべし、これ禪家に所謂不思議、不思議の旨と一轍なり、芳野の山にたどりて花を賞する人は、風を惡て花の爲に逆なりとす、しかれども風は發散の役人なれば花の爲に逆なりとて吹ずにも居ず、これ花を賞する時は逆也といへども炎帝柄を乗て夏の暑氣酷しき時は納涼の庭に風を戀ひ扇團扇に招き寄て身の爲に順也とす、姨捨更科の月を弄する人は村雲を逆也として惡めども、村雲は雲の役人なれば三五夜中にも遠慮して出ずには居ず、しかれども世界早魃の折からは突兀山の端に面さし出すといなや、皇天の加祐を得たる心地す、これ月には逆也とて惡む村雲も早魃の時は順とす、然ら



ば順も順に非ず、逆も逆に非ず、順逆の當躰あたうたいいづれの處に於て  
すべけんや、日は晝ひるを順とし夜よを逆とし、月は夜を順とし晝ひるを  
逆とするに似たれども、日月にっげつとも順逆に心はあるまじ、順逆の  
名は人の名付る所なり且かつそれ、伯益はくえきは井戸いほを鑿ほつて民たみに水の利を  
教へ、燧人氏すゐじんしは石いしを鑽きつて火ひを取との道みちを教ゆ、食しよくを燒湯やまゆを沸わかす水  
火ひの利用りよう大にして皆これに頼より、しかれども知伯ちはくは水みづをもつて  
趙てうの城しろを漫ひたし、董卓とうたくは火ひをもつて漢室かんしつを焚捨やきすてたり、水みづは伯益はくえきの  
手てに在あつては順じゆんとなり、知伯ちはくに在あつては逆ぎやくとなる、火ひは燧人氏すゐじんしに在あつ  
ては順じゆんとなり、董卓とうたくにあつては逆ぎやくとなれども、水火すゐか何んぞ順逆  
を事こととせんや、順逆は人の一心いしんより製造ていぞういだす物ものなり、汝なんぢ、順逆  
是非しぜいを心に置おかざんば胸中けうちゆう明らかなる鏡かがみの如し、順相じゆんさうをも迎むかへ

ず逆相ぎやくさうをも送おくらず、萬像ばんざうを止めず常に悠然ゆうぜんたらんのみ。

評 此篇ハ順逆是非ノ差別ヲ説キテ、悟道ノ方針ヲ指示セ  
シモノナリ、然レドモ其説ク所ハ老莊ノ見解ヨリ、佛法ノ  
悟道ヲ揣摩セシモノナレバ、之ヲ以テ直チニ禪學ノ根底ヲ  
開闡シタルモノト思フハ誤リナリ。

○出門逢釋迦

人の行末ゆくすゑと質しちの流れは何國いづくにへゆくも知れずとは古ふるひ臺詞たいしなれ  
ど、否いやと云はれぬ詞ことばなり、三浦屋みやまの孔雀くわんぐ染ぞめが、品川しんがわへ舞下まるも  
世よの有様ありさまなるべし、爰こゝに土器町かわらけに家内けいだい三四十人も暮くらし仕廻ししよた屋や  
あり、一人ひとりの男子おとこを持つ、其生立そのおひたちの利發りはつさ、兩親ふたおやの悦よろこび末頼母すゑたのも



しく思ふ所に、我善坊谷の頓廻といふ按摩取に擱立られ、十九の年から年増に穿て尻の毛までむしられ、是はならぬと色くの事にかゝり、する事なす事皆悲しければ終に勘當の引導を請て、心におこらぬ發心して名を鈍鉛と付て彼方此方を吟ひけるが、元來、利根者なれば、昔の一座せし由縁の寺へ尋ね行て阿彌陀經を讀覺て四十八夜があれは穀屋の世話をやき、文字が讀るにしたがひて鼓吹物を見て談議の真似を、高島屋が聲色で仕覺へ、後には人も聞やうになるに隨ひ、釋迦と提婆が出合の所は成田屋と音羽屋麻耶夫人の事をいへは、新駒、羅喉羅は立花屋阿難は訥子耶輸陀羅は大和屋、阿闍世太子は勘五郎迦葉は八百藏舍利弗は松助と、役わりを極めてつかひ分ての談議に群集

をなしける、佛法も末に成たかして、談議僧も時花役者の顔に似ると聞人も多く、役者の聲色で談議を説くと、錢の取様も多くなり、此僧も後には人々市川鈍鉛といひけり、談議もあがるに隨がひ身上もよくなりいつの程にか墨の衣を色の衣に着替て、水晶の珠數を手にかけて十念を授ける顔つきは、位牌を壇林に重ねたる積學の大和尚とぞ見へにける、或時住寺の名代に且方へ非時に往て法事も過ぎ、四方の咄する折から、しわがれたる聲にて鼻様今夜も知れぬにしめしの支度はいかな、お腹がむくく五月蠅こんだに、エ、と、二人連で店先に立並ぶ、鈍鉛亭主に向ひアレ見給へ、頭を丸めて衣を着れば先は出家の様に見ゆれど、身には破れた單物を着て、首に天台の輪袈裟を



懸、口に云ふは經文に曾てなき事なり、山伏の歌祭文と聞けば  
 それにもあらず、あの如くなる事をいひて有難き佛の道を汚す  
 は未來の程が不便にござるといふ、時に二人の内に三十には四  
 ツ五ツも足ぬ坊主キツと振返りて、いや和尚様、坊様よ、此袈  
 裟を天台とは目も見へるの、何じや我等を佛道にない事をいふ  
 のと嘲り、それは近比せまい見識なり、私は佛學はきらい、儒  
 學は窮屈な、神道は面倒也、我等が本寺は洛陽鞍馬山の多門天  
 なり、多くの門を貰ひ歩行、五文たまれば幾世餅を喰ひ、八文  
 あれば一盃のみ、十六文でぶつかけ蕎麥、河豚の吸物鱒の饅、  
 あまさず洩さぬ八宗兼學、なんと廣大無邊な事であらふがな、  
 チト貴様の安心の程がうけ給りたいといひければ、鈍鉛大きに

披毛從此  
 得作佛亦  
 從他

怒をなし、其方どもが乞食同前の身で、大切なる彌陀の本願淨  
 土の安心を説たりとも、やわか聞得る事はあるまじ、先近くは  
 十方を貰ひ今日をおくるは即ち彌陀の他力の場じや、無用の  
 論をせんより早く行けど云ひければ、いや行くまい我等を乞食  
 同前なるとは元より乞食頭陀の出家なればこつちもそつちも同  
 事なり、貴様がたが人を勧るに經卷、陀羅尼、座禪、觀法も入  
 らぬ念佛を第一に唱さへすれば佛になる、經文の上に拘わるは  
 小乘門でわるい、彌陀の他力本願の大綱に取付て何れも角も打捨  
 て、南無阿彌陀佛と唱ふるに如くはないと勸込がそれでは氣の  
 毒な斷無見といふて嫌ふ事じや、鉦を叩て念佛さへ唱ふれば成  
 佛の本懐をとぐるとは合點まいらぬ、阿彌陀の名を唱へて貴賤



の隔もなく、極樂へ往生して佛に成るに相違がなくば、此頃は極樂に明店はあるまい、又今の後生願と罵りて日課味噌を上る者どもを見るに、阿彌陀經一卷よみ覺へたはなくて、十に八九は一丈不通の族が貴様がたの様な聲色談議を聞覺て、口を叩くのはや、不學不才の身を持って念佛ばかり唱へて佛に成ふとは、番太郎が大臣に成ふといふやうなねがひて不届な事也「唱ふれば佛も我もなかりけり、南無阿彌陀佛の聲計して」といふ歌の深意が、鉦を叩て高聲をしたばかりでは濟まい、一向專念の理に通して一心不亂の妙所を悟得ず、大聲をあげて念佛を唱て成佛がなると思ふは迷ひの上の迷ならずや、阿彌陀の名號を幾百萬遍唱れば現當兩益になるの、此世をは榮華に暮し死では能い

所へ生れるとは、きつい欲心ではあるまいか、其よい所へ生れたいといふ欲心で唱ふる念佛が何の功德も利益もあるものぞ、又俗人に禪學して悟るとて座禪などをする人があるが、士農工商の四民ともに悟りは第一に務むべき事也、士は君へ忠を盡し一命を輕じ私なく務むるが士の悟るべき道なり百姓は四季の時を違へず耕 耘て飢る者のなきようにするが農人の悟り、細工人は其職々の物を作り出して天下の用欠ぬが悟り、商人は利欲に耽らず世間の用の不足なきようにするが悟りなるに、出家の業をなして地獄極樂の沙汰に届度するは愚な事也、扱又因果報ひのと云ふて畜生を殺せば畜生に生れ、刃傷して死ねば修羅道に生を受ると言が、誠ならば人を殺した者は人間世界に佛像



を破却した者は其報應で佛界に性をうくる筈の事なるぞ、出家に魚鳥を喰ひ、遊女を買て佛の救へに背くものもあるが、其報で佛が菩薩に成であるふ、薯蕷の鰻になるは、天地の變化とも云ふべきが、寺持の子持になるは何の變化何の報ひであるふ、現世を見て未來を知ると云ふて此世で善事をすれば善い所へ往生し、惡をすれば墮獄の罪は遁ぬ事なり、十惡の者でも最後に正念に阿彌陀の名を唱ふれば淨土に往生すると云ふが、法を犯して死刑に成る者でも、死後に念佛を正念に唱へたらは救はずにも置れまい、攝取れば阿彌陀殿は惡を懲す政道の妨をする様な所があつて氣の毒な、又經文にも十方皆佛土と説き、己心の彌陀唯心の淨土と云ひ西方十萬億土と説いて、どつちが嘘か眞

の事やらどぎついで知れず、併も去此不遠と説き、娑婆即寂光土と説き、苦難なく憂惱もなきを安樂世界といふと説かれば、死で先きにやかまし出入は見へず、一切衆生悉有佛性とあれば少しは頼母しく思はる、迷故三界城を破りて、本來無東西何處有南北と悟り得て、直指人心顯正成佛の偽りならざるを知らば、朝から晩まで鉦を叩て佛に成ふと念佛申は五日蠅こんだに、なまあだ、なんまみだんぶつと、節を付てわめきたてるが、是でも佛に成られる物なら濡手で粟をつかむといふもの、したが佛祖釋迦如來の御心には違ひそふな事なり、宗祖圓光大師も御腹立であるふ、諸天諸佛共に欲心や邪慢はきつい御嫌ひどうけ給わる、我等が斯く人の笑ひを催し怒も憂も忘れさせ



て、暫くも、本来の面目をいたためぬ様に、親の前でも大事はな  
いから、腐れた達摩の尻も結ばず、管をまいてぞ歸りける。

評 見思ノ二惑ハ吾人ニ取リテ最モ厭フベク斥クベキノ煩  
惱ナリ、本篇ハ見思二惑ノ斷セザルベカラザル事ト、妄見  
邪思ガ生死ノ一大事ニ障害アル所以ヲ具サニ辨シテ餘蘊ナ  
シ、偶マ篇中念佛ト悟道トノ事ヲ誹リタル嫌アルハ、真正  
ノ念佛行者及禪學者等ヲ誹リシニアラズシテ似非者流ヲ誹  
リシモノナリ。

### ○主賓分ニ兔馬

烏鷄ある時、一休に問て曰、私、ども死後は何になる事にや、

前生もなく死後もなし、また曰、しかしながらたゞ今鷄と  
私とは形甚だ相違いたし候へば、死後も又二色に成る事候  
哉、夫は有相の分別也、今は出家も在家もみな其了簡ゆへ釋迦  
の意にも、孔子の意も甚ちごう事也、それならば、違はぬ事  
を先一通り云て聞すべし、鷄は白し烏は黒く、形にては黒白の  
相違なり、鷄の玉子と烏の玉子を潰し、一所にし何れを烏、何  
れを鷄と見分申さるべきや、兩方ともに黄白の二色なれば中  
く見分られる物にあらず、形の出来るに順ひて色相は自然に  
備る事なり、是は天徳の働きて義理もなく道理もなし、釋  
迦と烏は形甚だ異といへども、釋迦も火は熱し水はつめた  
し、各も火の熱き事を知て、火事場へゆき足で搔廻す鷄もなく、



妙在 一 遍  
前 豈 容 于  
聖 眼

火の中のぞく鳥もなし、米は聖人も米と見、各々も米は米と知  
て喰らふなり、米に似たる小石が有ても石は石と知て喰はず、  
形は違ども見知る所に於ては毛頭ちがひなし、此見しる物は天  
徳にして二ツなきゆへ、見知るをさして佛と云ひ、明徳とも大  
明神とも云ふ事也、それ故に釋迦も佛、各々も佛也、佛と云ふ  
は形の上の事にあらず、佛性と云ひ大明神と云、明徳といふは  
見聞覺知の替名なり、死後に佛になるにはあらず、生のまゝに  
て佛境界也、去に依て釋迦も言ずや、はじめて知る衆生本來成  
佛なりとあり、見聞覺知の妙用をさして一佛乗と立、孔子も我  
道は一以貫くといふ事也、萬物唯一ツにて根元は天徳の 働  
なれば、有にあらず無にあらず、一と云し所もなき事ゆへ萬法

一に歸す、一何れの所にか歸すとあり、然に今學問する人も、  
文字の義理ばかり覺て聖人の本意を知らず、百性は日々用て  
相知らず、見れども見へず、喰ども其味を知らぬ人が多き事  
也、一ツに貫くとは、人も草木も禽獸も皆一ツといふ事なり、  
釋迦孔子は無爲の法成に、夫を今有爲の法と心得、みなく形  
の上と成ゆへ、別物に成て一貫に立ず、一佛乗も立ず、莫大の  
相違となる事なり、今にても有無をはなれ志人はたがひに一貫  
通る事なり、今にて大乘無爲の法は知る人少く、合點が行ぬゆ  
へ當代にては甚合ず、夫ゆへ外道といひ、無の見などい  
ひ、事の外嫌ふ事也、みな人有の見ゆへ無の見といふ事あり、  
根元有無一致なれば、有無に好きらひは且てなき事也、我は山



家の土坊主なれば萬事にくらく、其かわりには有の見もなく、  
 無の見も、空見もなし、有無をはなれし人は我意をしるべし、  
 今にては頭を刷色衣を着し、大寺の住持となれば自分にもよき  
 出家と成たると思ひ、他の人よりも尊き出家とおもふ事也、頭  
 を刷たは坊主也、茶を立れば茶道坊主也、三味線ひけば座頭な  
 り、衣を着すれば堂守坊主なり、誠の出家と云は、生死の家も  
 出、善惡の家も出、佛の家も出、萬事にはなれ切たる人をさし  
 て、僧俗男女にかぎらず、まとの出家といふなり、釋迦を始  
 八宗九宗の祖師は一ツとして住家なく、心の出家したる人故ま  
 との出家なり、古歌に「そめばやなころのうちのちを墨染に、衣  
 の色はどにもかくにも」此歌の如く、心の色こそありがたけれ、

紫衣も紅衣も更に尊きものにあらず、夢窓國師に女生滅を問ふ  
 其歌に「苧をつむになかくみじかくむつかしい、有無をはなる  
 身ともならばや」國師の返歌に「苧のそのを種まかざりしそ  
 のさきは、有無といふべきとの葉もなし」此場にいたらねば尊  
 き僧にはあらず、染ばなやの歌の趣意、出家のみにあらず、大  
 名にてもかたちばかり大名にては尊き人にあらず、諸士も大小  
 指たるばかりにて諸士にはあらず儒者も文字の義理道理ばかり  
 能覺しとて學者にはあらず、右の古歌を正して「研ばやな心の  
 うちを研揚に、刀の錆はどにもかくにも」欲の錆も命のおしき  
 錆も事の外研げぬものなり、大小の錆は金次第にて如何様にも  
 研る事なり、心の錆はいかほど研でも跡から曇て中々研揚には



容易に成ものにあらず、正宗貞宗を指料にすれば能嗜とて人々譽ることなり、是も金次第にていかなる名作も指料と成事也、正宗を指ても心が奈良ものにては、正宗も何の用に立物にあらず、指料の善悪は今日の飾なり、出家の衣も同じ事なり、畢竟何の用に立物に非ず、諸士は心の正宗を専らにたしなみ、出家は心の紫衣を専にすべき事なり、何者も志こそ要なるべし、聖人とても生れまゝの明德に於ては多少もなく、尊卑もなければども、御養ひには及ぬ事ゆへ、其廣大を今に尊敬する事也、何事にても一事ばかり覺しとて曾て尊き人にあらず、多くの人、善は善と計り覺へ、悪事は悪事と計り覺て、善悪不二成事を知らず、物毎に片よる也、よく／＼見るべし、金銀は世

界の寶にして結構な物なれども火を付、盜をするも博奕打も皆金銀がほしさの事也、それゆへ金銀は悪事の根元なれば強て望物にあらず、人を生ずも殺も全く金銀なれば善悪一致成、風も極暑の時分そよ／＼と吹時は極暑を凌、人の助と成る強く吹時は竹木人家まで吹倒して人を害し、甚だ悪事と成、其時には善悪の二ツと成迄にて、根元は一致なり、万事此理を以て善悪二ツなき事を知るべし、又一事ばかりよく知ればとて自慢する事もなく、羨む事もなく、其人に恐る事もなし、出家一道をよく覺て神道の用にもたゝず、禪家一宗を覺て日蓮宗の用にもたゝず、農業能覺て町人の用にも立ず、儒道よく覺て武藝の用にもたゝず、武藝も一流ばかり能おぼへしとて自慢する事もなく、



有理伸不  
得有口問  
不得

路從平所  
嶮人向靜  
中忙

其人を上て譽る事もなし人も此方に勝方なれば此方も又人に勝  
方也、他流と立合何流にもものこらず勝たれば上手ともいふべき  
か、いかほど業能しといふても業をはなれた人に業にては勝ぬ  
ものなり、儲また火付、盜賊、博奕等の業をなすものは悪人な  
れども其仲間にては其悪業の上手ほど善人なり、探偵の上手は  
世界の調寶になりて善人なれども、悪業をなすもの、手前では  
是が又悪人なり、人を生すほどの善事はなけれども善事なれば  
とて悪人をたすけては世界の難義なり、人殺は大悪事なれども  
悪人を殺せば至極の善事也、總て何者も善人にならずはまる  
事なり町人にては利根な人にて萬事吞込よく、商ひも功者にて  
主人の爲に成ゆへ、其人の善を見込て番頭にする事なり、此者

も始の程は萬事引請、大切に務れども、年々勤るうちに欲に目  
が付て己が利根に迷ひ、かれこれと謀をもつて大分引負して  
主人にも損をさせ逃はしる事なり、人は一人なれども分別次第  
にて善惡二ツと成事なり、孔子の御示の如く、何者にても日々  
新にさへすれば人の爲にも成、身の害も出來ぬ事なり、これら  
はみなく知れた事なれども、つねく養ねば氣のつかぬもの  
なり、それゆへ善惡二ツに見る人計にて、善惡不二成事を知る  
人少し、萬端これに准じて知るべし、萬法唯一如なり、餘りに  
長く成ゆへ、咄も是まで留るなり、世界は何事も浪の音と知  
るべし、と烏鷄言下に大悟す。

鳥一首 暫しこそ木の葉の覆ふ谷川の、清き流れはいつも



一休返歌

かわらじ

暫しこそ木の葉の上を覆ふとも、素より清きたにかわの水

鳥狂句

今こそは生死のひまをわけからず

鶏一首

もどよりもさやけき月の有なから、心の闇にまよひぬる哉

一休返歌

もどよりも闇の月夜は暗からじ、月夜に誰も迷ひこそすれ

評 本篇ハ主トシテ有爲無爲ノ二法ニ就キテ悟道ノ極理ヲ説キシモノナリ、其篇中儒に涉リ、佛ニ涉リテ説ク所アルハ、唯タ是レ主客ノ便宜法ヲ採リシニ過ギズ。

○鏡藉ニ重磨一瑩(俗公按)

百日の説法も今ひとつにして、日和もよく、百家八宗の先生達の取もちにて此和尙も一兩年は樂々と蒲焼にもありつき如何にか慶快なり、井筒が風廉も心やすく、さて巻中に説残したる秘書有、釋迦孔子も此境を遠慮して説残し、古人も夢介にて春日を暮したる事なり、何と先生何方であると思召、白いものにあらず、赤いものにあらず、丸いものにもあらず、春風には嵯峨芳野の花さくら、その鳴聲雷の如く、是を放てば六合に彌り、是をまけば退て一に歸す、我こゝに、天地の妙理を書顯はさん考ふるに、古人に遠慮して筆捨山の松風とは成けり、愚の至



とて忘たるにはあらず、元來知らざるが故に古人に遠慮する事  
なり、我等も其の昔は道行本にわたり、青い先生なり、寅のど  
しの大水にて書物を流し素人となり、やんまどんぼが一文。

評 此篇ハ世人ノ妄見妄執ヲ攘排シタルモノニシテ、筆々  
滑稽ニ涉リ、文々洒落ニ流レ過ギタルガ爲メニ、或ハ趣旨ノ  
糾量スルニ難キ所ナリ、讀者仔細ニ眼ヲ着ケヨ。

○甘露亦殺レ人

茶椀に清水を入むと欲する者は、下地の悪水をこぼして入る時  
は濁らぬものなり、人は己れくの好む處を病と知るべし、是  
とするものを捨て其志を友とする時は、人有、我よきと欲する

ものは元來聞覺へ見覺へたる事なり、是は己々の本心を味ます  
狐なり、我慢も偏見も、皆己れを知らざる人の大切に思ふ事な  
り、我等が門にては箇様な金言にても久しく腹中に貯ふる時  
は穢息となるゆへに直に悪水と見て盈して捨てる事なり、また  
當時富貴に屬して貧窮を敵とし、人の茶飯喰たをして、自分は  
留主をつかふ者を俳諧の罪人と云、灯心にて縊り出口の柳にさ  
らすべし。

評 突如トシテ心性ノ動靜統理ヲ辨ヲ出シ、輕々ニ其理趣  
ヲ覈シ去ル、筆力ヲ役スル鬼神ガ如シ。

○白雲起ニ峯頭



猫と傘とはよく失ふ物なり、用心あるべし、先の有家を尋いだすといへ共、さして公邊の沙汰もなし、金と女房を鹿末にする時は、人どうなづいて走るものなり、それゆへ夫婦暮の君子も手づから水汲飯焚で昔の琴爪詠る事也、金を守る親仁も、その爲に一代つかわれて、聊死期にくる志み、跡は親類の修羅起り、佛にうら見たく、寺参もせぬ事有ものなり、夫は持ぬ沙汰の云事、此柳下駄は何處でかりてうせたや。

評 此篇ハ因縁業報ノ理趣ヲ説キシモノニシテ、言簡、理洞、意到リテ味深シト謂フベシ。

○靠倒ス維摩詰

昔上古天真論に曰、夫婦は二世にあらざんば誠を語ず、醫は三世にあらざんば理屈を出ずと云事は、何と云事ぞや、岐童が所謂大方四ツあり、猫の疝氣には天木蓼、犬に薄荷、鳥に蕃椒、梅に鶯などとして、色々に備りし薬ありしに、その中に櫻は雲と云浮名たちけり、櫻華、皆はその天年を経て道に到るの端なり、何のころよりか、人は陰陽の兩儀より五行の名をよび出し、素難の論がたらぬとて、細見道行本までたくはへ、千八百餘種の青物にて、中々足りる事にもあらず、十二經水にいたつては、賀茂川、玉川あり、二十四脉の外に曾我の病あり、西明寺雪の段に、委き先生の薬のきかぬと云事は、理屈の穴へ腰打かけて、扱もうちかけて、古人に化されるがゆへなり、然れ



ば學文の理屈をもはなれて、高く乾坤の外に遊ぶ事なりと心得  
 たる先生が、せんだく婆々の脛詠め、鎌倉袖が浦へ落、疝氣と  
 なる人も有故に、本來先天の地もいで、金剛爲無眞人の都に  
 到時は、八風の虚邪の來る方もなく、北風の屁の行衛もしら  
 ず、眞人無爲虚無の妙理にもいたり、船乗の入日、糊うり婆々  
 の摺子木の音に翌の日和も樂々と知れる事なり、八百屋の娘と  
 聞て戀の病とさどすは、空裡に華を見るが如し、御醫者さまで  
 も坊さまでも、附た理屈はぬけはせぬ。

評 此篇ハ老莊學者ノ見識ヲ以テ空理ヲ談シタリ、故ニ一  
 徑地ニ本篇ノ要旨ヲ將チテ佛道ニ説ク、真空假空中、道實相  
 ノ理趣ト同一ニ看做スベカラズ、况ンヤ空々ニアラズ、色

々ニアラザル事ヲ珠要トスル禪門ノ極意ト同一ニ看做ス事  
 テヤ、其誤リヤ知ルベキノミ、讀者能ク此意ヲ諒シテ本旨  
 ノアル所ヲ覺レヨ。

○高歩毘盧頂

風雅の道を樂人は萬物の理を明らかに、造化の根元を知り、  
 己々の本來無根の發明する時は我慢なし、理屈を離て月花の造  
 化を出、造化に遊ぶ事なり上手と名人との境は一步千里の違あ  
 りて、自在の働とは云べし、世界にあらゆる理屈を並べて、  
 内には無盡の不理屈阿房を知るべし、人情の遠道に晝寢の枕を  
 あぐれば、親仁白眼ていはく、親代々の寶は寂滅爲樂、世の中



のあらゆる山事も、譯の有たけ仕盡して、手前剃の頭に蝙蝠羽織、出家かど聞ば、肴を喰い、道人かど問ば、我満の波高く、己が心の花鳥を知らず、木綿の袋首にかけ、やかましき池の蛙や、淀の浮草の行衛たづねて露霜にうたれ、芳野の花には、人の焼飯を觀し、田家の邊を口言云て歩行もあり、本草綱目を考るに、鳥の部にもあらず、虫の部にもあらず、眼の早き事鳶の如く、口の廻る事車輪の如く、近年是に風流仲間と云事出來てその流を争ひ、童子の喧嘩に似たり、色に淫するものあり、狂ふものあり、紙に書た味噌蓋も破て、心の花鳥に遊ぶ翁も堀さらいの損より、風呂ふき大根の買置に至るまで、説玉ふところの風流は皆、餅舂歳旦の花鳥なり、隣の音を今一曰聞て

粘皮著骨

寝も年忘の花鳥、佛家には、内儀法界小童無益、と説玉ふ、夫婦は姿の花鳥に遊び、姿は心の花鳥なり、山鳩の小言も詩經の周南に譽られて、心の花鳥にたとふ、親仁の小言も塵功記に譽られて、八算の花鳥にたとふ。

評 近ク喩ヲ取り、圓カニ理ヲ究メ、斷感證理ノ法ヲ説キ得テ輕妙、下根劣機ノ衆生ニ取りテハ、最上醍醐ノ妙味アルベシ。

○泥佛不渡水

世の中の有様を考るに、犬骨折て鷹にとらるゝと云譬尤なり、昔より唐土にても青龍刀振廻し、赤顔して騒ぎ廻る先生を初と







を知らず、去に依て家屋敷いづれの所にか有る、今掃溜に富士の山ほどの捨土に薄の延て、伊豆山の黒木石の並べてあるは、皆貧乏神どもの墓印なり、町人百姓の學問風雅は心得べき事なり、この時落て粹者とはなる者なり、爰に一ツ教がある、鱈はひしこを厭ず、米は黒を得とし魚のあざれて、香の悪きは鹽にすべし、鳶飛で空に遊ぶ時は油揚の油断すべからず、魚の淵に踊る時は、屋形船の夜更る事を考へ、君臣に義理あつて佛餉袋の柔らかなる事を知り、父子恩あつて勘當の肌寒きを覺へ、夫婦に法界あつて摺鉢の音を觀じ、朋友に信あつて蒲焼の直段を知る、是みな法經華の教にして、昔より諸々の賢き人の紙屑に書残したる糟粕あり、心ある先生は云ずと聞ずと知れた事、然

長者長法  
身短者短  
法身

ば放埒になりども、阿房になりども、勝手次第に遊ぶべし、我があづかる事にはあらず、細見に委しき人は戀の淵にはまり、川越しの川で果て、醫者殿の食傷、うづかりとして井戸端の茶碗。

評 此篇ハ法華經ニ據テ人間行爲ノ規矩ヲ發揮シタルモノニシテ、深甚ノ理趣ハ言々句々ニ蘊蓄スレハ、決シテ之ヲ勿々ニ看過スルコト勿レ。

○歩々是道場

闇をあやなす梅の枝なんぞへ、夜なく星の天降らせ玉ふにつけても、日蓮宗ほど難有る宗旨は天竺にも有べからず、祖師の



一代御難に逢せられし事聞につけても、小松原にて鬢先の割る  
 ほど尊き事なり、先この宗旨にては法華經を本意として、我慢  
 第一とはするなり、此祖の説玉ふは、上根上智の人は自己の  
 骨折にて成佛すべし、中根中智の人は一軸を讀誦して知るべ  
 し、下根下智の衆生は一心に此經を唱へて成佛疑ひなし、然れ  
 ば祖師も野暮にもあらず、サテ各々方、難有き事に思召せ、空  
 劫以前に本朝の神は西の海へさらり、今我等が宗旨の頭べへは  
 かり八百萬神とりついて頭痛とは成ることなり傾城無間、茶屋  
 天魔と説きたもふ事左もあるべし、今時の傾城に誠は引窓の念  
 佛、外の宗旨は知らず、茶屋天魔は尤もなり、昔は名のある人  
 を撰び茶屋の亭主と仰ぎ、今時は皆明渡し賣買に成り、又は童

一金成萬  
 器皆由匠  
 者功

子の天窓刷とかし亭主になるもあり、マタたま〜自己の沙汰  
 あるを見るに色々の献立細工料理にて人をくらまし、正法の紙  
 花は夢にも知らぬ事なり、八宗の中でも茶屋は宗王にして色里  
 に無て叶ぬなり、然れば山門の裏道を許す酒までも氣を付べき  
 事なり、他宗の悪口いわずとも説法を初ましよ、抑も八歳の龍  
 女即心成佛と云ふ事あり、今時の娘が八歳や十歳にて嫁入のな  
 ることにもあらず、初産に驚き椽の下へ飛込ことあるべし、祖  
 師も此所を危く思召、奉公あがりの法界、宿下りの恪氣一心に  
 此經を唱へて平産疑ひなし、今年の益過は芝居も大當り、太夫  
 さしきが五兩札、向が一兩、切落が百字、西の河原の追込、し  
 やう事なしの恪坊がたの一文、一天四海間夫精靈、地黄代と



して五百字、爲ニ菩提一、南無妙法蓮華經。

評 此篇ハ法華經ノ無上勝尊ナル所以ヲ説キシモノニシテ、機類成佛ノ事ヨリ、神道ノ迷信者ヲ攻撃スル所、又龍女ノ成佛ヲ談シテ、唱題平産疑ヒ無キ事ヲ説クルヲ一讀スレバ唯抱腹絶倒スルノミ。

○法々本來法

これく童子此臺の上へ登りや、竹田の口上云て聞すべし、サテ御目通り飾り置ましたる操は、竹生鳥不埒遊びともふす細工でござります、最初は此人形に魂が三ツありて、其一は靈々として鏡の影に順ふが如く、善惡の隔もなく、本より明にし

て分別の臺をはなれます、其二は名利の間に交り、手習學問を致し寺澤流より唐様に移り詩歌の花に汚れ、其三は酒色の中へ飛び美服器財に奢り、糸竹へ音を入れ、出口の柳と化、排灯と消ます、サテ右の三ツの魂を、君臣に譬て夫々の家を修ます、然るに二臣の放埒より終に其君を掠め、主人は本より何の分別も無ものにござれば、國を奪れ家を失ひ、今は行衛もなく荒野の花となり、サテ例の二臣の世となり、名利の岐に我を忘れ、酒色の市に人と争ひ、終に宗門帳を出て、勘當帳に入ります、此時一門の人形打寄評議として何卒その君の魂を呼返志、父母生來の家を相續させんと存、佛家では目蓮の通力を習ひ、儒門には宰我が辨舌を傳へ、その魂の有家を尋ます、首陽の蕨も



燒盡して、左様の賢君も見へず、今狐狸の住居となり、信田の森と化ます、吝と已味の細工に御座りますれば、度々家を失る命の及ぶ事、ゆるくと御一覽の程を願います。

評 佛道ニ於テ波羅密ト云ヒ、儒教ニ於テ格物致知ト云フモ、其理趣ニ至リテハ概テ相同マク、人間ノ智徳ヲ圓滿ニ發揮セシムルノ方向順序ヲ知ラシムルニ外ナラズ、乃チ本篇ハ佛、儒教ノ要旨ヲ概括シテ、人間ガ智徳ヲ發揮セズンベアル可ラザル所以ヲ説キシモノナリ。

○棒喝辨龍蛇

神儒佛の道を考るに、教の事は知らず、儒道は盛んに行はれ

て佛道の衰たるは歎しき事なり、如何となれば、裏店の隅に三隅を擧る先生を初として光る物に縁遠く、貧窮の穴より己々の身を守り、道の爲とはなる事なり、宮柱などに木の子を見せて大破の理はりも皆、是神道の正に行はるゝこと尊き事なり、箱根の山中にて駕籠昇の薪を脊負ふ翁は、今は昔の歴々、何を種とて芋の草をヒンむしる事なり、佛家には堂塔伽藍の光を放ち、出家は錦にくるまり、二人曳にて地行の仙となるは、道の裏と知るべし、貧窮に住して、石上寒巖の窟に在して、自己の骨折、道にも到るべき事なり、今時の僧を見ると、我慢の波高く公事沙汰多し、道に志ある者は理屈の穴を出で乾坤を獨歩し、鳶、鳥の真似して水を呑ことなり、是みな富貴に屬し



是非交結  
所聖亦不  
能辨

て生死に流轉するが故なり、道を外にして酒色の中へ魂飛、俗中の俗を笑べし、昔は居士院號は高位にあつて或は地下にも其徳ある人を稱する事なり、今時は惡水土泥の邊、蕪の葉に埋み茶も足らぬ石牌にも、大欲院阿房居士など、書付、裏には着屋の六助、抑も百旦那には心經一卷、中には一くだりつ、鯖を讀み、佛も元來文盲なる物ゆへ、默然と抹香喰て居る事なり、入佛ことの献立は鹽の辛ひ茄子の香の物、餓鬼に唐辛の付焼、近年月牌と云ふ事初り、何萬人なりとも取込勝負、朝夕の佛飯を見るに猫子の飯ほどならではなし、中々精靈の口濡らすことさて置、仲間喧嘩にて天窓はり合餓鬼道の苦となる事なり、夫ゆへ益、彼岸に來る迎も、夢中にて我もくと門違ひなく飛込

ことなり、コレく先生、それは理屈の味噌漬とて、聲の大な方が勝喧嘩、寺の罪ばかりにも非ず、其施主ども、大欲心、同じ山師の寄合、油断なる事にあらず、今時は出家衆にても覺への有る事にて天地あらん限りは扶持すべしと請負とて、誠に焚出し渡す時は、先祖へ不孝、兩人の阿房第欲心、同罪にして瘦馬に附ても權衡平にして問屋場の業の秤にて喧嘩顔して幾十貫、なんぞ極樂のたて荷札にても、此間の大雨にて死出の山路の廻り道、西の河原も大水にて、爐鞍橋も落、業人どもの骨を集め材木として掛橋となす事なればなかく埒の明く事にもあらず、今は弘誓の舟渡、經帷子まげても、六道錢の底はたあても、馬士が合點する事にあらず、西六、出立、その喧嘩は



己が貰ふべし、六十貫でも百貫でも、地獄の沙汰も錢次第、阪  
は照く鈴鹿は曇る。

評 釋尊ハ佛道ノ最勝眞實ノ法ナル事ヲ説キ玉ヒシニモ拘  
ハラズ、法滅盡經蓮華面經等ニハ、末法佛道ノ衰頽シテ淺  
マシキ有様ヲ現ハスニ至ルコトヲ豫言セラレタリ、釋尊在  
世中ニ於テ尙ホ且然リ、然ラバ則チ此篇ニ於テ今日末法ノ  
時ニ於ケル佛道衰頽ノ有様ヲ説クモノハ、決シテ偶然ノ事  
ニアラザルナリ、篇中稍々佛道ヲ毀レル所アルガ如キモ、  
是レ佛道ヲ毀レルニアラズシテ、佛者鄙行ヲ誹リシモノナ  
リ。

○南無乾屎橛

夫れ佛法は心法なり、色に自性を悟て此心の自在を得るを要と  
す、此外更に求むるところなし、既に自性を悟るときは六趣四  
生を目の下に見おろし直に三十三天を打越、釋迦阿彌陀にも對  
面すべし、觀音勢至をも友とすべし、至る所即ち花降り音樂聞  
へ、生もなく死もなく、是非眞妄の心頭に横たはることなく、  
天地を丸呑にして喉につまることなし、火に入ても不焼、水に  
入ても溺るゝことなし是を見性成佛と云ふ、實に成りがたき  
事にあらず、只三毒の妄想を拂去て本來固有の心體にかへるの  
み、微塵ばかりも外より求ること有るに非ず、是を以て佛の教



け物もいらす、才覺をも勞せず、只生れたるまゝの我れにかへ  
 るまでなり、斯いへば置たる物を取やうに易が如くなれども、  
 彼三毒の妄想心頭にまどはり居て牛頭馬頭の鬼となり、方寸の  
 内に八大地獄を造立し色々に住居を替、八百八色に身を變じて  
 餓鬼、畜生、修羅、刀山、叫喚、燒熱等の種々の所を經廻歩、  
 日夜に我を呵責すること障なし、この所をよく合點して勤て三  
 毒の惡鬼を退けたまへ、三毒の惡鬼退かは見性の門に入ることや  
 すかるべし、是を漸修の工夫といふ、然ども、志怠りては  
 叶べからず、源の義家奥州責の如く、十死一生の軍にあらす  
 むば彼惡鬼ども退くべからず、道は近きにあり遠きに求むべか  
 ず、と儒教にもみゑたり、自性の外に道有と云は外道なり、俗

學なり、佛法にも非ず儒道にも非ず、「問」何をか悟といふ、  
 「答」曰く、悟とは夢の悟たるなり、覺と云もおなじ、此心二  
 ツあるにはあらず、夢中には嬉きことあり、悲しきことあり、  
 恐しきことあり、苦しき事あり、皆な常に思ふところの妄想  
 魂にとゞまり心中に流轉して此夢をなす、夢中には是を實事  
 と思ひ、或は喜び或は怒り、或は恐れ或は苦しむ、悟て後眠を  
 開きて見れば、今迄有し苦樂得失は境界去て跡なし、初て是夢  
 にして實事にあらざることを知て、自ら笑ふ、凡人の境界渾て  
 夢に似たり、吾が愚痴の情欲妄想種々に轉化し其妄心の内に  
 て、苦樂得失の境界をなし、喜怒哀樂の客かわるく來て主の  
 位を奪ひ、本心の主は有が如く無が如し、夢中境界に何ぞ異な



らん、一旦工夫内に徹志て本心の主に對面する時は、自性本覺の眼開け、四方明らかに成て今迄意識情欲を以て建立したる苦樂得失の境界一時に滅じて跡なし是を悟りといふ。

評 本來ノ心性ヲ見出シ、苦樂生滅ヲ出離解脫シタル境界  
コソ眞ノ悟リニシテ此一篇ハ最モ茲ニ力ヲ凝シテ説キ示シ  
タルモノナリ。

○棒下無生忍

問て曰く六祖と申はいかなる人にて候哉答て曰く是生知の人なり、惠能とてもと新州嶺南と云片田舎の百姓なり、毎に柴を賣て母を養ふ、二十四歳のとき行客の「應無所住而生其心」とい

ふ事を唱へて過るを聞て直に内に徹して心體開る事あり、「其人に問て曰く、此何といふ經にて何方にて習ひ來り給ふぞ」といふ客の曰く、是金剛經なり、斷列黃梅縣の東禪寺に弘忍大師といふ人あり、達摩より五代の祖なり、其所より此經を聽受し來るといふ、惠能急に志を起し黃梅に往て弘忍に謁せん事を思ふ、人其志を憐みて銀十兩をあたふ、惠能是を以て母の衣糧に宛て三十日を経て黃梅に至り弘忍を禮拜す、弘忍曰く、汝は何方の人ぞ、亦何を求るや、惠能曰く、我は嶺南の百姓なり、遠く此に來りて師を拜する事は佛に作むことを求む、此外に何をか求めん、弘忍曰く、汝は嶺南の揭獠なり、何ぞ容易佛になるべけんや、惠能曰く、人に南北ありといへども佛性もど南北な



作麼

し、揭獠の身かつれうと和尚わしやうとおなじからずと雖も佛性ぶつぜうなん何ぞ差別しやべあらむ、此時このときはや弘忍かうにん是これ只者ただしやうにあらざと思はれけれども何となくもてなし汝衆なんじしやうに隨したがつて佛前ぶつぜんの務つとめをせよと云れければ、惠能ゑい曰く、我自身われじしん毎つねに智惠ちゑを生じて自性じせいを不離はなれせ、和尚わしやう何なんの務つとめをかなさしむるや、弘忍かうにん曰く、汝なんぢは至極しきくの大膽たいだんものなり重ねて物云ものいことなかれとて、裏うらの碓房つぎやへやりて薪たきぎをわらせ、碓つぎをふましむ、八月はつげつ月つきを経て初はつて弘忍かうにん碓房つぎやに來りて惠能ゑいに謂いつて曰く、吾われ初はつより汝なんぢの器き量りやうを知るといへども悪人の爲ために害がいせられんことを恐おそれて汝なんぢと道みちを語かたらず、汝なんぢ我が心こころを知るや、惠能ゑい曰く、吾われも亦また師しの心こころを知る、故ゆゑに和尚わしやうの許もとにゆかずといふ、其後そのち弘忍かうにん大衆たいしやうを集めて曰く、我われ汝なんぢに向むかひて説とく、世人生死せいじんしやうじ事こと大也たいなり、汝等なんぢら終日しゆうじつ只ただ福田ふくでん（再生さいせい之の）を求もとて

不了

生死しやうじの苦海くかいを出離しゆつりすることを不もと求もとめ、自性じせい若迷しやうしは、再生さいせいの福ふく何ぞ救すくべき、汝等なんぢら各おの去くて自ら智惠ちゑを看み、自ら本心ほんしん般若はん若にやの性せいを取とり、各々いちぢ一偈いちげを作り來つて我われに呈ませよ、看みて若たし大意たいいを悟さとる者ものあらば達摩たつま以來いらい相傳さうでんの衣鉢えはつを與あへて第六代だいろくだいの祖そとせん、火急くわきふに速すみかに去くれ遲滯ちたいすること勿なれ、思量しりやうせば意識いしぎに落おちて用ように不中ふちゆう、見性けんしやうの人ひと若たし如此このごと者ものは輪刀上りんとうじやうの陣じんにも亦また見みることを得えむ、衆皆しゆがな遲議ちぎして其中そのなかの教授けうじゆ師し神秀しんしゆに責せむ、神秀しんしゆ不得ふ辭じ、をづく一偈いちげを作り南廊なんらうの壁かべに書付かきつけ置して退しりぞく、其偈そのげに云いふ、「身是みは菩提ぼだい樹じゆ、心如こは三明さんめい鏡かみ、臺たい時とき々々勤拂きんぷつ拭ふ、勿なレ使せ惹ひ惹ひ三塵さんじん埃あ」弘忍かうにん此偈このげを見て、神秀しんしゆが未いまだ自性じせいを悟さとらざることを知る、然しかども大衆たいしやうに示しして曰く、此偈このげを留とどめて誦持じゆぢせよ、此偈このげに依よりて修しゆせば惡道あくだうに墮たすること



まぬがれむ、此偈に依て修せば利益あらんと云て門人に命じて  
 香を焼て禮敬せしめ、此偈を誦せば即ち見性を得むといふ、門  
 人皆な偈を誦して善哉と歎ず、其夜三更に弘忍神秀を呼で曰く、  
 偈は是汝が作なりや、曰く然り、師の曰く、汝いまだ本性を不  
 見、只門外に至ていまだ門内に不入、如此の見解を以て無上菩  
 提を覓どもに了不可得、無上菩提は言下に自の本心を識り、  
 自の本性を見て不生不滅なることを得べし、一切時中におい  
 て念念自ら見て萬法滯なく一真一切真萬境、自から如々也、  
 如々の心即ち是真實也、若如此見は、即是無上菩提の自性  
 なり、汝且く去て再び一偈を作り來れど、神秀自得すること能  
 はず、それより兩日あつて一人の童子神秀が偈を誦して碓房の

傍を過ぐ、惠能問て曰く、是何の偈ぞ、童子曰く、神秀上座自  
 得の偈にして大師の深く讚歎し給ふところなり、汝何ぞ是を知  
 らん、惠能曰く、我碓を踏事八ヶ月、いまだ曾て堂前に至るこ  
 となし、願はくは我を連て堂前に至れ、此偈を禮拜せん、童子  
 即ち導て堂前に至る、惠能偈を拜し了て我も又一偈あり、我物  
 書こと能はず、吾が爲に書せよといふ、衆みな笑ふ、江州の別  
 駕帳日用といふ者人を侮るべからずと云て筆を執て即ち書す、  
 其偈に云「菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵  
 埃」衆皆な驚く、弘忍衆の驚くを見て心甚だ歡喜すれども彼惡  
 人の爲に害せられんことを恐れて是いまだ見性せざるものを偈  
 なりとして鞋を以て其偈擦し去る、次の日夜更て碓房に入り、惠能



が石を腰に付て碓を踏を見て曰く、道を求めるの人法の爲に身を忘る事當に如此成べしや、因て問ふ、米精たりや否や、惠能が曰く、米はよく精たれども篩人なし、弘忍杖を以て碓を三度拍て歸、惠能心得て夜三更に至つて師の室に至る、師袈裟を以て圍て其の來たるを人に知らしめず、ために金剛經を説く「應無所住而生其心」と云どころにて惠能言下に大悟す一切の萬法自性を不離事を、遂に師に謂て曰く、何ぞ期せむ、自性もとのづから清淨なることを、自性もと生滅なく尙ぞ期せむ、自性もとのづから具足することを、自性本來動搖なし、自性よく萬法を生すと、師其本性を悟るとを知て頓教及び衣鉢を傳へて去らしむ、人これを知ることなし、なを悪人の爲に害せら

問事即得  
好去

れんことを恐れて師みづから送て九江澤に至て別かる惠能南行して大庾嶺に至る時、按の如く數百人跡より追來て、衣鉢を奪はむとす、其中に惠明と云もの眞先に進て追付たり、惠能即ち衣鉢を石上に擲捨、此衣は信を表す、力を以て奪べけんやと、其身は草の内に隱居る、惠明も流石本心に耻て衣をどることも不能、此ところをさして大盤石の如くにて不動といふ、惠明呼て曰く、我は衣鉢を奪むために來るにはあらず、法の爲に來るなり、願はくは出て一句を示せと云、惠能出て石上に座して曰く、汝法の爲に來らば諸縁を止よ、一念を生ずることなかれ、吾汝がために説む、良久して曰く、「不思議、不思議、正與麼時那箇、是明上座本來面目、」惠明言下に大悟す、其後惠能曹



溪に至り、又悪人の爲に探れて獵師の中に隠れ居て、獵師の肉を煮る鍋の中へ菜大根を切こみ、共に煮て菜大根ばかりを拾ひあげて食し居たり、夫より十五年経て廣州の法性寺にて印窓法師涅槃經を講ずるところに至る、時に風吹て旛を動かす、一僧曰く、風動くと、一僧は曰く、旛動くと互に論して止ず、惠能進で曰く、風の動くにあらざ、旛の動くにあらざ各々の心動くと云、衆皆な驚く、印窓聞て是只人にあらざ、黄梅の衣法南に來ると聞、定めて此人成べしとて呼で内に入て問、惠能曰く、然り、印窓作禮して衣鉢を拜し因て問「黄梅の附屬如何か指授する」、惠能曰く、「指授は即ちなし、唯見性を論じて禪定解脱を論ぜず」、印窓曰く、「何ぞ禪定解脱を論ぜざる」、答て曰く、「是れ

二法の是れ佛法にあらざるがためなり、佛法は是不二の法なり、「印窓又問「如何成か是佛法不二の法」答曰く「法師涅槃經を講じて佛性をわかす是佛法不二の法なり」と云々、佛の曰く、善根に有二一ツには常、二ツには無常、佛性は非常、非無常、是故に不斷名付て不二とす、一には善、二には不善、佛性は非善非不善、是を不二と名付、蓋と界と凡夫は見一、智者は其性無二也、無二の性即是佛性なり、印窓説を聞て歡喜合掌して曰く、吾が經を講ずるは瓦礫の如し、惠能の議論は眞金の如しと、是に於て惠能をすゝめて剃髮せしめ、師とし事ふ、是より禪法中國に明らかなり是を、六祖大鑑真空普覺禪師と號、唐の中宗の時なり、御母則天皇后並中宗頻りに徴ども病と稱し



て不出、生涯朝廷に交らず、在所の新州に終り曹溪に葬る、」  
 初祖達摩大師も始めて中國にわたり一たび梁の武帝に謁し給ふ  
 時、武帝曰く「我一生幾許の寺を建立し幾許の僧を供養し布施  
 設齋す、此功德如何」と問、達摩「無功德」と答てそれより逃て  
 魏の國へ去り給ふ、魏の孝明帝の前にて菩提流支三藏と道を論  
 じて不叶、終に少室山へ引籠り九年而壁して二祖惠可に法を傳  
 へ終に菩提流支が爲に毒害せられて果給ふ、其後墓より出て芦  
 の葉に乗天竺へ歸り給ふに逢たりと云ふ僧あり、心得がたし、  
 總して大徳の人は天命に任せて私の作爲を用ゐることなし釋  
 尊の墓より出で天に上り給ふことを聞ず、唯禪者ばかりにあら  
 ず、孔孟と雖も道の行はれざるところには長居は仕給はず、も

十年枕上  
 塵中夢半  
 夜燈火物  
 外心

とより富貴に取入ことなし、唯禪者のみ氣違ひ者のやうに思ひ  
 給ふな、儒者といへども道の爲には餓死するをもかへり見ず、  
 孔子魯を去給ふ時は炊かけたる飯を不食にかけ出し給ふ、欲の  
 深き心より、法の爲などいふて言をかこつけ、富貴の家に取入  
 己れ尊く思はれ、人の邪魔になり、我が所作にもあらぬ事に口  
 を入れ國の害をなしたる者おほし、只欲心をさへ離るれば心も  
 身も自由なるものなり」

評 此篇ハ、主トシテ惠能和尙が見性徹底セシ來歴ヲ説キ  
 テ以テ心身ノ圓融無礙ナル所以ヲ示シタルモノナリ、其順  
 序ノ整然トシテ趣旨ノ貫穿スル所アルニ至リテハ、蓋シ全  
 ク本書中ノ壓篇ヲ謂フベシ。



大乘洒落禪終

明治三十四年二月十八日印刷  
明治三十四年三月四日發行

洒落禪奧附  
正價拾五錢

發行者

東京市京橋區中橋和泉町四番地  
奧村金次郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
石川金太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
株式會社 秀英 舍



發行所 藍外堂書舖

東京市京橋區中橋和泉町



藍外堂書舖出版書目 ○正價●郵稅

隱應義塾大學部講師 小宮山毅介先生輯  
近世豪傑譚 全三册合卷 ○四拾五錢●八錢

石川鴻齋 土田淡堂兩先生序并評 內田彌八先生著  
義經再興記 附義經遠征 全一册 ○貳拾五錢●四錢

內藤昞叟先生序 增田千信先生校註  
校訂徒然草 全一册 ○貳拾錢●四錢

增田千信先生校註  
校訂土佐日記 全一册 ○拾錢●貳錢

今泉定介先生校閱 上田胤比古先生標註  
校訂方丈記 全一册 ○八錢●貳錢

和漢金言集 正續合卷 全一册 ○拾五錢●四錢

法學士宮田四八先生序 佐藤天外先生編述  
名士と金言 全一册 ○貳拾錢●四錢

菅原如庵先生著 中村不折先生畫  
禪學通俗談 全一册 ○拾八錢●四錢

薄泥庵有田子著 織田杏齋先生畫  
通俗禪學八十則 全一册 ○拾五錢●貳錢

無佛居士編并評  
大洒落禪 全一册 ○拾五錢●貳錢

玄龍禪師 中禪庵主 如庵居士合著  
通俗座禪法 全一册 ○八錢●貳錢

荻野獨園禪師題 菅原如庵先生著  
應用膽力養成法 全一册 ○拾五錢●四錢

澤庵禪師 山本晴幸 森景鎮 小堀長順先生等著  
武藝叢書 全一册 ○拾貳錢●貳錢

無名氏著  
武道合氣の術 全一册 ○拾錢●貳錢

秘訣 明洪自誠先生原著 河村北溟先生通解  
菜根譚通解 上下合卷 全一册 ○貳拾錢●四錢



子爵本莊宗武君題詠 平山齋齋先生題字 近藤嘉三先生著  
心理魔術と催眠術 全一册 ○拾五錢●四錢

幻術の理 法附神と幽霊 全一册 ○拾五錢●貳錢

指月道士著 仙術と忍術 全一册 ○拾錢●貳錢

菅原如庵 加藤孤鷹兩先生合著 人心觀破術 附天稟と運命 全一册 ○貳拾五錢●四錢

中山實先生發明著述 智術應用 歸納的相場必勝法 全一册 ○拾五錢●貳錢

野鶴花園主人著 和歌一即席轉作法 全一册 ○拾貳錢●貳錢

岡部陽洲先生校閱 奧村朝陽先生編纂 日本大軍歌 全一册 ○拾五錢●四錢

骨皮道人校閱 二世の彌次郎兵衛 同喜多八合著 瀛車栗毛鐵道笑歌 全一册 ○八錢●貳錢

美加匯會大人著(各女學校參考用書) 花むすび 奉書彩色摺 大本全一册 ○九拾錢外二小包料

葛飾北齋翁畫 繪本 魁 全一册 ○貳拾五錢●貳錢

繪本武藏證 全一册 ○同 ●同

繪本和漢譽 全一册 ○同 ●同

西洲居戲畫 滑稽狂畫 苑 全一册 ○貳拾錢●貳錢

酒落狂畫 著者不詳 古錢鑑 全一册 ○八錢●貳錢

岡部陽洲先生著 臺灣地圖 一 枚 ○八錢●貳錢

志佐勝先生譯 スペルリング獨案内 全一册 ○拾錢●貳錢



146  
490

吉 豫 書 刊 近

○粹語 莊子 演義  
 ○拔摘 山子 操志  
 ○高論 漫錄  
 ○增警 門百 話錄  
 ○禪學 問答  
 ○通禪 迷開 悟答  
 ○破 智 術  
 ○當意 頓 法  
 ○即妙 頓 法  
 ○肺病 全治 附豫防と養生  
 ○容顏 美人 法 附化粧及服裝  
 ○艶麗 美人 法 附化粧及服裝  
 ○通 俗 哲 學  
 ○陽明 學 入 門  
 ○御注文の節は前金御送附願上候●郵券代用は總て壹割増の事●御照會の節は返信用郵券御封入又は往復はつきに非ざれば回答不仕候●御住所氏名は楷書にて正確に御認め被下度候

《行發次逐書奇本珍ほ猶外の記上》



白濁がかったもの

きつていよいよ

まじりあつて

あつていよいよ

